

国道 431 号道路改築事業（川津バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

金クソ谷遺跡 4 区・一の谷古墳

2011 年 3 月

島根県教育委員会

金クソ谷遺跡 4 区・一の谷古墳

国道四三一号道路改築事業（川津バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

二〇一一年三月

島根県教育委員会

国道 431 号道路改築事業（川津バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

金クソ谷遺跡 4 区・一の谷古墳

2011 年 3 月

鳥根県教育委員会

序

本書は鳥根県教育委員会が鳥根県土木部から委託を受けて、平成20年度から平成21年度に実施した国道431号道路改築事業（川津バイパス）予定地内に所在する金クソ谷遺跡4区及び一の谷古墳の発掘調査成果をまとめたものです。

金クソ谷遺跡4区は、嵩山より派生した丘陵の北端に位置する遺跡です。近隣には、嶋根郡家の推定地の一つである芝原遺跡や、古代の集落遺跡である中嶺遺跡などが所在し、今回の発掘調査でも、これらの遺跡と時代の重なる7世紀から9世紀にかけての遺物が確認されました。

また一の谷古墳は、朝酌川流域の丘陵上に立地する古墳です。調査の結果、規模が約20mの古墳時代中期後半の古墳であることが確認されました。この時期には朝酌川流域においても国指定史跡の金崎古墳群をはじめ多くの古墳が知られています。今回の調査では主体部から粘土槨や長頸鎌が検出されるなど古墳時代中期の墓制の様相が明らかになりました。これらの成果が地域の歴史や埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に当たり御協力いただきました地元住民の皆様や、松江市、松江市教育委員会、鳥根県土木部をはじめとする関係機関の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成23年3月

鳥根県教育委員会

教育長 今井康雄

例 言

1. 鳥根県土木部道路建設課から委託を受けて、平成20年度及び21年度に実施した国道431号道路改築事業（川津バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書で報告する遺跡は次のとおりである。
金クソ谷遺跡4区 鳥根県松江市福原町字菟神田944-20ほか
一の谷古墳 鳥根県松江市下東川津町1373ほか
3. 調査組織は次のとおりである。
【平成20年度】
事務局 ト部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同副所長）、赤山 治（同総務グループ課長）、土江 肇（同総務G主任）、宮澤明久（同調査第1グループ課長）
調査員 伊藤 智（同調査第1グループ文化財保護主任）、平井大介（同調査補助員）
【平成21年度】
事務局 川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、山根雅之（同総務グループ課長）、片桐浩孝（同総務グループ主幹）、宮澤明久（同調査第1グループ課長）、
調査員 伊藤 智（同調査第1グループ文化財保護主任）、松山智弘（同調査補助員）、野津研吾（同）
【平成22年度】
事務局 川原和人（埋蔵文化財調査センター所長）、山根雅之（同総務グループ課長）、片桐浩孝（同総務グループ主幹）、内田律雄（同調査第2グループ課長）、今岡一三（同調査第4グループ課長）
調査員 伊藤 智（同調査第4グループ文化財保護主任）
4. 発掘調査及び報告書作成にあたっては以下の方々から有益な御指導をいただいた。記して謝意を表させていただく。（敬称略）
岩本 崇（鳥根大学文学部准教授）、大橋泰夫（鳥根大学文学部教授）、田中義昭（鳥根県文化財保護審議会委員）、町田 章（鳥根県文化財保護審議会会長）、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館館長）
5. 本書のうち、柳岡中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系のX軸方向を指し、座標系のXY座標は世界測地系による。レベル高は海拔示す。
6. 本文・図版中の表記に用いた遺構略号は次のとおりである。SK：土坑、SD：溝状遺構、P：ピット、SX：その他の遺構
7. 第2、3図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000を使用した。
8. 本書に掲載した実測図の作成と浄書は調査員・補助員、整理作業員が行い、写真は伊藤 智、松山智弘が撮影した。
9. 本書の執筆と編集は伊藤 智が行った。
10. 本書の編集はDTPにより行い、ソフトはadobe社In Design CS4、Photoshop CS4、Illustrator CS4を使用した。
11. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第2章	遺跡の位置と環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	3
第3章	金クソ谷遺跡4区の調査	11
第1節	調査の経過と概要	11
第2節	遺構と遺物	11
第3節	総括	19
第4章	一の谷古墳の調査	21
第1節	調査の経過と概要	21
第2節	遺構と遺物	25
第3節	総括	40

挿図目次

第 1 図	遺跡の位置図	1
第 2 図	周辺の遺跡（朝酌川流域）	4
第 3 図	周辺の遺跡（本庄川流域）	8
第 4 図	金クソ谷遺跡 4 区位置図	12
第 5 図	金クソ谷遺跡 4 区調査前測量図	13
第 6 図	金クソ谷遺跡 4 区遺構配置図	14
第 7 図	金クソ谷遺跡 4 区ベルト A 土層断面図	15
第 8 図	金クソ谷遺跡 4 区ベルト B・C 土層断面図	16
第 9 図	金クソ谷遺跡 4 区遺構実測図	17
第 10 図	金クソ谷 4 区遺物出土状況図	18
第 11 図	金クソ谷遺跡 4 区遺物実測図	18
第 12 図	一の谷古墳調査区位置図	22
第 13 図	一の谷古墳遺構配置図	23
第 14 図	苅捨古墳・一の谷古墳調査前測量図	24
第 15 図	一の谷古墳調査前測量図	26
第 16 図	一の谷古墳墳丘土層図	27・28
第 17 図	一の谷古墳墳丘測量図	29
第 18 図	一の谷古墳黒色土検出範囲図	30
第 19 図	一の谷古墳主体部実測図 1	31
第 20 図	一の谷古墳鉄鍬出土状況図	32
第 21 図	一の谷古墳主体部実測図 2	32
第 22 図	一の谷古墳出土鉄鍬実測図 1	34
第 23 図	一の谷古墳出土鉄鍬実測図 2	35
第 24 図	一の谷古墳 SD01・ビット実測図	36
第 25 図	一の谷古墳 SD01・P05 出土遺物実測図	37
第 26 図	一の谷古墳 SD02 実測図	38
第 27 図	一の谷古墳出土遺物実測図	39
第 28 図	鉄鍬鍬身部模式図	40
第 29 図	一の谷古墳出土鉄鍬一覧図	41
第 30 図	一の谷古墳出土鉄鍬に類似する鉄鍬	42
第 31 図	一の谷古墳主体部構築模式図	44

表目次

表 1	川津バイパス発掘調査遺跡一覧表	2
表 2	金クソ谷遺跡 4 区出土土器観察表	19
表 3	金クソ谷遺跡 4 区出土石製品観察表	19
表 4	金クソ谷遺跡 4 区出土古銭観察表	19
表 5	一の谷古墳出土鉄器観察表	33
表 6	一の谷古墳出土土器観察表	39
表 7	一の谷古墳出土石製品観察表	39
表 8	一の谷古墳出土鉄鍬分類表	41
表 9	増福寺 3 号墳・4 号墳出土鉄鍬	43
表 10	二名留 3 号墳出土鉄鍬	43
表 11	朝酌川流域の中期古墳比較表	45

写真図版目次

- 図版 1 1. 金クソ谷遺跡4区調査前風景(北から)
2. 金クソ谷遺跡4区ビット検出状況(北西から)
- 図版 2 1. 金クソ谷遺跡4区ベルトA土層断面(1)(南東から)
2. 金クソ谷遺跡4区ベルトA土層断面(2)(東から)
- 図版 3 1. 金クソ谷遺跡4区ベルトA土層断面(3)(東から)
2. 金クソ谷遺跡4区ベルトB土層断面(1)(北東から)
- 図版 4 1. 金クソ谷遺跡4区ベルトB土層断面(2)(北東から)
2. 金クソ谷遺跡4区ベルトB土層断面(3)(北から)
- 図版 5 1. 金クソ谷遺跡4区ベルトC土層断面(1)(北から)
2. 金クソ谷遺跡4区ベルトC土層断面(2)(北東から)
- 図版 6 1. 金クソ谷遺跡4区完掘状況(西から)
2. 金クソ谷遺跡4区完掘状況(北から)
- 図版 7 1. 金クソ谷遺跡4区(上空から)
2. 金クソ谷遺跡4区(南東上空から)
- 図版 8 1. 金クソ谷遺跡4区出土遺物(1)
2. 金クソ谷遺跡4区出土遺物(2)
- 図版 9 1. 一の谷古墳調査前風景(1)(南西から)
2. 一の谷古墳調査前風景(2)(南西から)
- 図版 10 1. 一の谷古墳調査前風景(3)(北西から)
2. 一の谷古墳南西側調査前風景(1)(北東から)
- 図版 11 1. 一の谷古墳調査区中央部調査前風景(2)(北東から)
2. 一の谷古墳調査区中央部壁面土層断面(南から)
- 図版 12 1. 一の谷古墳E6-E7ライン土層断面(南から)
2. 一の谷古墳C5-D5ライン土層断面(西から)
- 図版 13 1. 一の谷古墳D5-E5ライン土層断面(西から)
2. 一の谷古墳E5-F5ライン土層断面(南西から)
- 図版 14 1. 一の谷古墳F5-G5ライン土層断面(南西から)
2. 一の谷古墳G5-H5ライン土層断面(南西から)
- 図版 15 1. 一の谷古墳E4-E5ライン土層断面(西から)
2. 一の谷古墳D5-E5ライン土層断面(南西から)
- 図版 16 1. 一の谷古墳E4-E5ライン土層断面(南から)
2. 一の谷古墳D6-D7ライン土層断面(南から)
- 図版 17 1. 一の谷古墳E3-E4ライン土層断面(東から)
2. 一の谷古墳主体部E⁺-Eライン土層断面(南から)
- 図版 18 1. 一の谷古墳主体部C-C⁻ライン土層断面(南から)
2. 一の谷古墳主体部C⁻-Cライン土層断面(南から)
- 図版 19 1. 一の谷古墳主体部E-E⁻ライン土層断面(北東から)
2. 一の谷古墳主体部E-E⁻ライン土層断面拡大(北東から)
3. 一の谷古墳主体部中央部横断土層断面(南西から)

- 図版 20 1.一の谷古墳主体部B-B'ライン土層断面(北西から)
2.一の谷古墳主体部鉄鍬出土状況(1)(南西から)
3.一の谷古墳主体部鉄鍬出土状況(2)(南西から)
- 図版 21 1.一の谷古墳鉄鍬出土状況(1)(南東から)
2.一の谷古墳鉄鍬出土状況(2)(南東から)
- 図版 22 1.一の谷古墳主体部粘土床検出状況(南西から)
- 図版 23 1.一の谷古墳主体部枕石及び粘土床検出状況(1)(南西から)
2.一の谷古墳主体部枕石及び粘土床検出状況(2)(南西から)
3.一の谷古墳主体部南端完掘状況(北東から)
- 図版 24 1.一の谷古墳主体部南端完掘状況(東から)
2.一の谷古墳主体部南端完掘状況拡大(北東から)
3.一の谷古墳主体部完掘状況(北東から)
- 図版 25 1.一の谷古墳E5-F5ライン土層断面(南西から)
2.一の谷古墳主体部南外土層断面(東から)
- 図版 26 1.一の谷古墳墳丘検出状況(南西から)
2.一の谷古墳墳頂部検出状況(南西から)
- 図版 27 1.一の谷古墳墳頂部黒色土検出状況(南西から)
2.一の谷古墳墳頂完掘状況(南西から)
- 図版 28 1.一の谷古墳西斜面須臾器出土状況(西から)
2.一の谷古墳SD02土層断面(北から)
3.一の谷古墳SD01検出状況(西から)
- 図版 29 1.一の谷古墳(1)(上空から)
2.一の谷古墳(2)(上空東から)
- 図版 30 1.一の谷古墳(3)(上空南から)
2.一の谷古墳(4)(上空西から)
- 図版 31 1.一の谷古墳主体部出土鉄鍬(1)
2.一の谷古墳主体部出土鉄鍬(2)
- 図版 32 1.鉄鍬3
2.鉄鍬12
3.鉄鍬3矢柄部分拡大写真(A)
4.鉄鍬3矢柄部分拡大写真(B)
5.鉄鍬12茎部分拡大写真(C)
- 図版 33 1.一の谷古墳出土遺物(1)
2.一の谷古墳出土遺物(2)
- 図版 34 1.一の谷古墳出土遺物(3)
2.一の谷古墳出土遺物(4)

第1章 調査に至る経緯

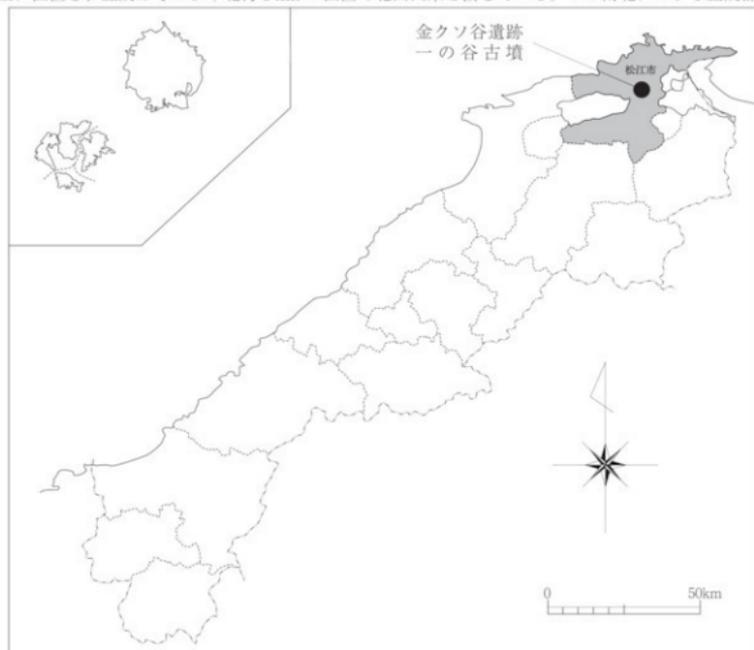
一般国道431号は、出雲市を起点とし、松江市、境港市を経て米子市に至る総延長95.8kmの、島根半島を東西に結ぶ広域幹線道路である。昭和40年代以降、松江市とその周辺地域では急激な都市化により、慢性的な交通渋滞が生じた。島根県はこの対策として松江市西川津町から同市野原町までの8.1kmの区間について4車線計画により昭和48年(1973年)度から道路改築事業に着手した。

島根県教育委員会は、昭和48年に島根県松江土木建築事務所(現:松江県土整備事務所)から依頼を受けて、路線決定に先立ち、遺跡の分布調査を行い、26か所で遺跡を確認した。この内容をもとに島根県教育委員会と松江土木建築事務所で協議しルートを決定した。また昭和62年(1987年)には松江市下東川津町祖子分長池古墳の調査に伴い、一の谷古墳を確認調査したほか同年に行った分布調査でも12遺跡を確認した。この事業によって発掘調査した遺跡は表1のとおりである。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

松江市福原町から上本庄町地内に所在する金クソ谷遺跡は、嵩山より北に向かって派生する丘陵上に位置し、丘陵はそこより北約1kmの位置で北山山系と接している。この南北にのびる丘陵部



第1図 遺跡の位置図

道路名	いせきめい	調査年度	報告書名	報告書発行年度
橋本道路	はしもといせき	昭和50年度	主要地方道路松江一境線ハイパス関係 歴史文化財調査報告書Ⅰ	昭和50年度 (1975.3)
紫Ⅰ道路	しばいちいせき	昭和50年度	主要地方道路松江一境線ハイパス関係 歴史文化財調査報告書Ⅰ	昭和50年度 (1975.3)
紫Ⅱ道路	しばにいせき	昭和50年度	主要地方道路松江一境線ハイパス関係 歴史文化財調査報告書Ⅰ	昭和50年度 (1975.3)
紫Ⅲ道路	しばにいせき	昭和56年度	主要地方道路松江一境線ハイパス関係 歴史文化財調査報告書Ⅰ	昭和56年度 (1982.2)
親子分長池古墳	そしふながいけこふん	昭和62年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅱ 親子分長池古墳	昭和60年度 (1988.12)
親子分胡麻畑道路	そしふごまばたけいせき	昭和62年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅱ 親子分長池古墳	昭和60年度 (1988.12)
八色谷古墳群	やいろだにこふんぐん	平成4年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅳ 八色谷古墳群	平成4年度 (1993.3)
本庄川桑里道路	ほんじょうがわじょうりいせき	平成8年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅴ 本庄川流域桑里道路	平成8年度 (1997.3)
荒船古墳群	あらふねこふんぐん	平成9年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅵ 荒船古墳群・荒船道路・本庄川流域桑里道路 (2)	平成9年度 (1998.3)
荒船道路	あらふねいせき	平成9年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅵ 荒船古墳群・荒船道路・本庄川流域桑里道路 (2)	平成9年度 (1998.3)
本庄川桑里道路	ほんじょうがわじょうりいせき	平成9年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅵ 荒船古墳群・荒船道路・本庄川流域桑里道路 (2)	平成9年度 (1998.3)
馬場道路	ばばいせき	平成10年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅶ 馬場道路・杉×換道路・客山墳墓群・連行道路	平成13年度 (2002.3)
杉×換道路	すぎがたわいせき	平成10年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅶ 馬場道路・杉×換道路・客山墳墓群・連行道路	平成13年度 (2002.3)
客山墳墓群	きやくさんふんぼくぐん	平成11・12年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅶ 馬場道路・杉×換道路・客山墳墓群・連行道路	平成13年度 (2002.3)
連行道路	れんぎょういせき	平成11・12年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅶ 馬場道路・杉×換道路・客山墳墓群・連行道路	平成13年度 (2002.3)
東前田道路	ひがしまえだいせき	平成13年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅷ 東前田道路・大谷口道路・中領道路・ 金タノ谷道路1区・2区・3区	平成18年度 (2007.3)
大谷口道路	おおたにぐちいせき	平成14・15年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅷ 東前田道路・大谷口道路・中領道路・ 金タノ谷道路1区・2区・3区	平成18年度 (2007.3)
中領道路	なかにめいせき	平成15～17年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅷ 東前田道路・大谷口道路・中領道路・ 金タノ谷道路1区・2区・3区	平成18年度 (2007.3)
金タノ谷道路 1区・2区・3区	かなくそだにいせき	平成17年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅷ 東前田道路・大谷口道路・中領道路・ 金タノ谷道路1区・2区・3区	平成18年度 (2007.3)
金タノ谷道路 4区	かなくそだにいせき	平成20年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅷ 金タノ谷道路4区、一の谷古墳	平成22年度 (2011.3)
一の谷古墳	いちのたにこふん	平成21年度	国道431号線ハイパス建設予定地内 歴史文化財調査報告書Ⅷ 金タノ谷道路4区、一の谷古墳	平成22年度 (2011.3)

表1 川津ハイパス発掘調査遺跡一覧表

分は、中海に流れる南川と、穴道湖に流れる朝酌川の分水嶺となっている。遺跡の北西 500 m には、島根郡家比定地である芝原遺跡が所在する。

一の谷古墳は、朝酌川左岸の標高 28～42 m の丘陵部に位置する。この丘陵北西端は川津平野に岬状にやや突き出る状況になっており、北東から流れてきた朝酌川が、この地点で南南西方向に流れを変えている。この変化点には西川津遺跡が所在しており、約 6,000 年前（縄文時代前期ころ）には、このあたり一帯に古穴道湖が広がっていたことが、発掘調査の成果から知られている。その後は朝酌川による沖積作用などにより現在の河口方向に陸化が進んだと考えられる。

第 2 節 歴史的環境

1. 朝酌川流域

【旧石器時代】

西川津遺跡（31）、タテチョウ遺跡（24）では、旧石器時代から縄文時代初頭にかけてのものと思われる尖頭器や細石刃核等の石器が出土しており、既にこの頃には人々の活動が行われていたことが想像される。

【縄文時代】

前期以降は気候が温暖な状況になり、海面が上昇して穴道湖は西川津遺跡付近まで広がっていたと推定される。縄文時代の遺跡は朝酌川流域の低湿地帯に存在することが知られており、西川津遺跡、原の前遺跡（142）、タテチョウ遺跡からは縄文時代早期末～晩期にかけての大量の遺物が発見され、この頃には既に定住的な集落が存在していたと考えられる。その他、島根大学構内遺跡（27）、からは縄文時代前期の丸木舟、金崎古墳群（28）の丘陵、及び城の越遺跡（39）からは後期と晩期の土器が出土している。

また、貝崎古墳群（8）が存在する丘陵の北側斜面より縄文時代早期末～前期初頭のスクレイパー、柴尾遺跡（103）、及び金崎古墳群の墳丘下からは早期と晩期の土器が発見され、縄文時代には、平地だけではなく、丘陵上でも人々の生活の営みがあったことが推定される。

金クソ谷遺跡 2 区（1）からは、縄文時代前期初頭の土器をはじめ、石器も確認されている。

【弥生時代】

縄文時代の終わりの頃には穴道湖の湖岸線が伸びはじめ、弥生時代になるとタテチョウ遺跡付近まで穴道湖の汀線が後退していたことが確認されている。そのため、周辺一帯は湿地帯となり、水田農耕に適していたと想像される。遺跡は、西川津遺跡やタテチョウ遺跡をはじめ橋本遺跡（19）、坂本中遺跡（63）などが知られている。西川津遺跡では前期から水田耕作に使用したと思われる多量の木製農耕具や石器、骨角器が土器とともに出土し、遺構としては前期の貝塚、中期の掘立柱建物跡等が検出されている。また同遺跡からは、後期の遺物包含層より、外縁付鈕 2 式もしくは扁平鈕古式の銅鐸片が出土している。後期では、溝跡から「J」字状のガラス製異形勾玉、河川堆積層から鹿の肩甲骨を利用した卜骨が出土している。

東持田町及び坂本町に所在する沢下遺跡（52）では、後期の四隅突出型墳丘墓 2 基を含む 5 基の墳丘墓が確認され、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、水銀朱などが出土している。

【古墳時代】

朝酌川流域の低丘陵地には多くの古墳が分布し、出雲地方における古墳の密集地の一つとなっている。



第2図 周辺の遺跡(朝酌川流域)(S=1/25000)

1	金クソ谷遺跡	49	道仙遺跡	97	後谷古墳群
2	一の谷古墳(菊捨2号墳)	50	納佐池古墳	98	川原古墳
3	菊捨古墳(菊捨1号墳)	51	原の空遺跡	99	横屋前遺跡
4	坂口古墳	52	沢下遺跡	100	元宮遺跡
5	住吉神社裏古墳	53	常熊古墳	101	粟佐間古墳
6	古屋敷立遺跡	54	薄井原古墳	102	西宗寺古墳
7	貝崎南古墳	55	香ヶ廻古墳群	103	柴尾古墳
8	貝崎古墳	56	中久路古墳	104	番貫I遺跡
9	前田古墳	57	細曾古墳群	105	貝先遺跡
10	後田古墳	58	小林古墳群	106	J31 経塚
11	家ノ上古墳	59	流田遺跡	107	J26古墳群
12	井上古墳	60	I59遺跡	108	嵩山籠遺跡
13	祖子分長池古墳	61	I53古墳	109	布自沢美峰跡
14	八色谷古墳群	62	坂本館跡	110	稻葉上跡
15	川津城跡	63	坂本中遺跡	111	高庭谷遺跡
16	J15城跡	64	安土山城跡	112	小廻遺跡
17	堤廻遺跡	65	古妙見古墳	113	杵築尾遺跡
18	柴Ⅱ遺跡	66	小川善之助裏山古墳群	114	米坂古墳群
19	橋本遺跡	67	坊塚庵寺	115	米坂遺跡
20	柴Ⅲ遺跡	68	往生院遺跡	116	G25窯跡
21	柴古墳群	69	澄水寺跡	117	鞍切遺跡
22	山崎古墳	70	上の堂横穴群	118	山辺遺跡
23	馬込山古墳群	71	夏目遺跡	119	廟所古墳
24	タテチョウ遺跡	72	山根古墳	120	梅面遺跡
25	上浜弓古墳	73	芝原遺跡	121	観音山1号墳
26	薬師山古墳	74	石裏遺跡	122	観音山2号墳
27	鳥根大学構内遺跡	75	玉野寺跡	123	間谷遺跡
28	金崎古墳群	76	平田古墳群	124	松ヶ鼻遺跡
29	福山古墳	77	鎌ヤガ尾根古墳群	125	新山遺跡
30	深町古墳	78	川上遺跡	126	朝酌小学校前古墳
31	西川津遺跡	79	中西古墳群	127	朝酌小学校校庭古墳
32	持田川流域桑里制遺構	80	小馬枝古墳群	128	廻原古墳群
33	宮垣古墳	81	京殿遺跡	129	蓮倉横穴群
34	大源古墳	82	荒神古墳群	130	九日宮古墳群
35	大佐遺跡	83	原ノ後遺跡	131	朝酌岩屋古墳
36	日吉垣の内古墳	84	扇ノ平遺跡	132	朝酌上神社跡古墳
37	小丸山古墳群	85	松音字遺跡	133	和久羅山城跡
38	松の前古墳群	86	前田遺跡	134	荒神谷遺跡
39	城の越古墳群	87	荒船遺跡	135	針田遺跡
40	城の越横穴	88	荒船古墳群	136	三大寺遺跡
41	砥石遺跡	89	中嶺遺跡	137	別所遺跡
42	鏡谷遺跡	90	大谷口遺跡	138	鷹沢A遺跡
43	石野遺跡	91	東前田遺跡	139	鷹沢B遺跡
44	石野古墳群	92	I24古墳群	140	別所古墳
45	I49古墳	93	I18遺跡	141	鷹沢野遺跡
46	立花横穴	94	中尾古墳群	142	原の前遺跡
47	太田古墳群	95	小松谷古墳		
48	納佐遺跡	96	川原後谷横穴群		

前期の古墳としては、納佐古墳群（道仙古墳群）(50)、小丸山古墳群 (37)、大佐遺跡 (35)、柴尾古墳群 (103)、苜捨古墳 (3) が挙げられる。一辺 10 m 以下の小規模な方墳が中心であるが、朝酌川左岸の丘陵頂部に位置する苜捨古墳は、直径約 20 m の楕円形の古墳であり、発掘調査により主体部から、前漢鏡（四孔懸龍文鏡）の破鏡と倣製鏡（振紋鏡）、勾玉、管玉、ガラス玉などが出土している。

中期以降の古墳には、馬込山古墳群 (23)、上浜弓古墳群 (25)、柴古墳群 (21)、住吉神社裏古墳 (5)、などがある。多くは一辺 20 m 以下の方墳が中心である。その中であって大源古墳 (34)、金崎古墳群 (28)、宮垣古墳群 (33) などは、20 m を超す大形の古墳である。金崎古墳群では 11 基の古墳が確認されており、1 号墳は全長 35 m の前方後方墳で、主体部構造・副葬品などの特徴から周辺一体の首長的存在の墓であったと推測される。

後期に入ると横穴式石室二つを内部主体とする、全長 50 m の前方後方墳である薄井原古墳 (54) や、各壁を 1 枚石で構成する石棺式石室をもつ太田古墳群 (5 基) (47) が出現する。これらの古墳の被葬者は、後に出雲国府が置かれた意宇川流域の古墳群には及ばないものの、朝酌川流域においては有力な首長であったことがうかがえる。その他、城の越横穴墓群 (40) などの横穴墓も造られるようになる。

一方、集落については、柴Ⅱ遺跡 (18) や堤廻遺跡 (17) などが知られている。柴Ⅱ遺跡は小さな谷間の奥部に所在し、前期の堅穴住居跡が 2 棟確認されている。堤廻遺跡は低丘陵の斜面に位置し、前期から中期にかけての堅穴住居跡 21 棟、掘立柱建物跡 2 棟からなり、多量の土器類をはじめ、滑石製品や玉の未製品などが出土した。また西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡では河川堆積物中に古墳時代の土師器や須臾器、木製品などの遺物が大量に発見されており、この時代の集落が朝酌川沿いにも存在し、洪水時に押し流されたことを示している。

【古代】

733（天平 5）年に作成された『出雲国風土記』によれば、この地域は島根郡山口郷に属していたと考えられ、川津・持田平野には条里制が施されていたと推定される。この時代の集落跡である鏡谷遺跡 (42) では、炊飯用の竈片や祭祀に使用された土馬が出土している。また高山 (109) には烽が置かれており、奈良時代には交通及び政治的に重要な地域であったと思われる。

島根郡の『郡家』の所在地には諸説あるが、松江市福原町の芝原遺跡 (73) では規則性を持った大規模な掘立柱建物跡が検出され、陶硯、墨書土器等も出土していることから、この遺跡が『島根郡家』である可能性が指摘されている。更に、芝原遺跡の南に位置する東前田遺跡 (91)、大谷口遺跡 (90)、中嶺遺跡 (89) からも掘立柱建物跡が検出され、仏具、墨書土器、付札木簡、権など官衙に特徴的な遺物が出土している。また古屋敷Ⅱ遺跡 (6) では、平安時代の加工段が検出されている。

平安時代に新たに建立されたと思われる寺院として坊床庵寺 (67)、往生院庵寺 (68) がある。坊床庵寺からは、軒丸瓦、軒平瓦と延喜通宝が入った骨蔵器が出土している。往生院庵寺からは、石積基壇や五輪塔、土師質土器、布目瓦が採集されている。

【中世】

古代、東川津・西川津地域は持田地域とともに山口郷に属していた。これに対し、中世では川津、西尾地域は「長田郷」、持田、坂本、福原地域は「持田荘」と呼ばれるようになった。（長田郷は後

に長田西郷と長田東郷に分かれる。)西川津遺跡では、掘立柱建物跡や囲炉裏と考えられる石組遺構が検出され、白磁、青磁、中世陶器、滑石製石鍋が出土している。貝先遺跡(105)では、掘立柱建物跡が検出された。山辺遺跡(118)では、鋳造関連遺物が出土している。元宮遺跡(100)では、経塚が検出され、青白磁の合子、白磁の小壺、鉄製利器、和鏡などが出土している。米坂古墳群(114)では、基壇を伴う一字一石経が検出され、下部からは骨蔵器として使用された瀬戸焼壺と備前焼壺が出土した。一字一石経が出土している。和久羅城跡(133)は、和久羅山山頂に棚、土塁、桁形虎口などが確認されている。澄水寺跡(69)では、澄水山の頂上(標高507m)からわずかに降ったゆるやかな斜面に多数の堂宇伽藍配置が確認され、常滑大甕、陶器、磁器が採集されている。

2. 本庄川流域

【旧石器時代】

新川下流において、旧石器の可能性のあるルヴァロア型尖頭器が採集されている。

【縄文時代】

荒船遺跡(16)では、草創期の有舌尖頭器が出土している。新庄町の松崎遺跡では後期と考えられる打製石器が出土している。連行遺跡(41)では、縄文時代と考えられる石器の原石や未成品などが出土している。

【弥生時代】

的場遺跡(28)では、後期の住居が検出され、古墳時代まで継続して集落が営まれている。連行遺跡では、弥生時代後期前葉から中葉にかけての堅穴住居跡が検出されている。客山墳墓群(42)では、後期末葉から古墳時代初めにかけての墳丘墓が検出されている。

【古墳時代】

前期古墳では新庄町の八日山1号墳(55)が確認されている。一辺23.5mの方墳で、三角縁神獸鏡が出土している。中期古墳では、木棺直葬の方墳である新庄町の客山1号墳(45)が確認されており、小型の倣製鏡(九乳文鏡)、刀子、管玉、ガラス小玉、櫛が主体部から出土している。丘陵部から離れた的場遺跡では、11基の方墳が墳丘を削平された状態で検出されている。馬場遺跡(26)、連行遺跡では5世紀後半から6世紀初めにかけての一辺10m前後の古墳が検出されている。後期古墳には、中西古墳群(46)があり、横穴式石室が露出しており、円筒埴輪が採集されている。横穴墓では、新庄町宮島谷古墳群(50)、梅廻横穴群(53)、坂山横穴墓群(44)、連行遺跡が発掘調査されている。

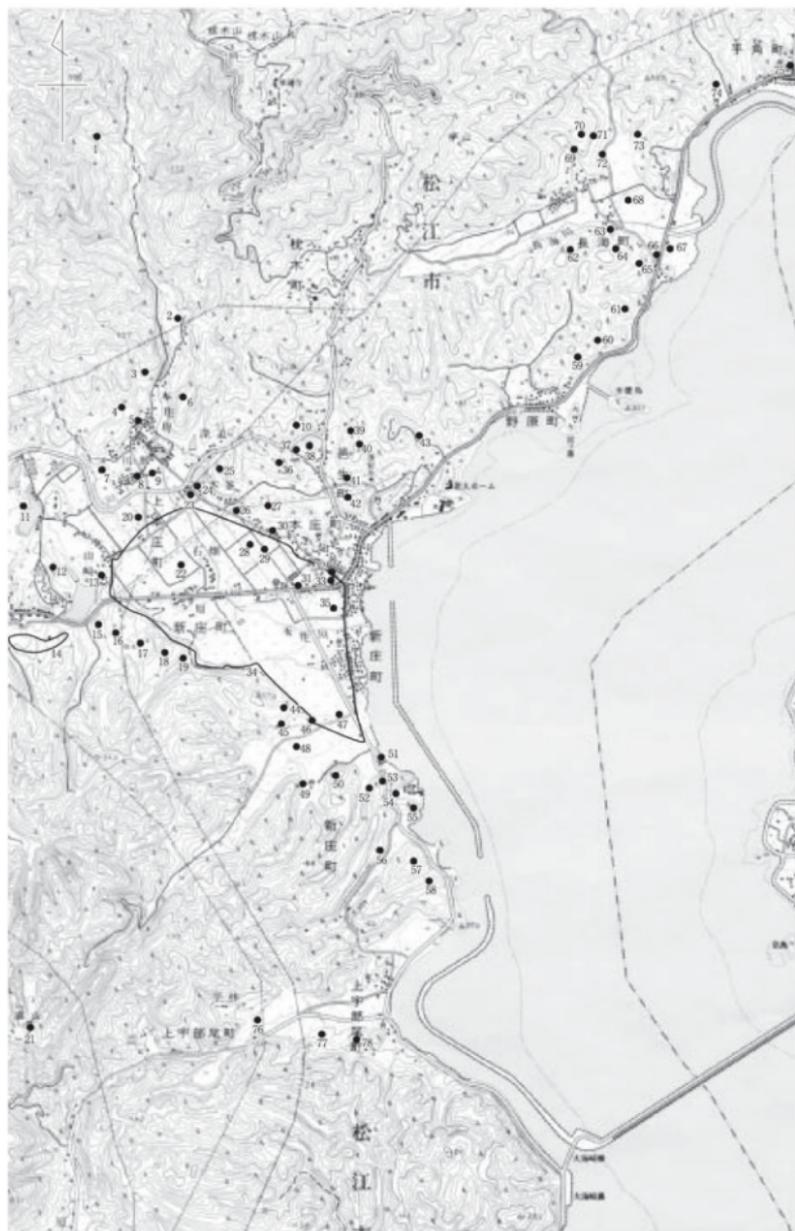
集落遺跡などでは、本庄川流域糸里制遺跡(34)において、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡が検出されている。杉ヶ挑遺跡、連行遺跡において、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、加工段などが検出されている。

【古代】

京殿遺跡(9)では、土馬、手捏土器等の祭祀遺跡関係遺物や硯、丹塗り土器が出土している。連行遺跡では、加工段、掘立柱建物跡が検出されている。

【中世】

的場遺跡では、掘立柱建物跡、土墳墓が検出されている。土墳墓からは、和鏡の上に完形の同安窯系青磁が伏せられた状態で出土している。館を備えた山城として上本庄町の城山城跡(25)がある。馬場遺跡では、来待石製の五輪塔、宝篋印塔が出土している。



第3図 周辺の遺跡(本庄川流域)(S=1/25000)

1	仁の谷遺跡	27	杉ヶ搦遺跡	53	梅廻横穴群
2	梨子谷遺跡	28	的場遺跡	54	八日谷遺跡
3	鎌ヤガ尾根古墳群	29	的場古墳群	55	八日山古墳群
4	金比羅古墳群	30	尊場古墳	56	大谷古墳群
5	川上遺跡	31	塚根古墳	57	鍛冶床古墳群
6	あん山城跡	32	天神山古墳	58	鍛冶床南横穴群
7	小馬枝古墳群	33	天神山遺跡	59	ガンダ横穴群
8	中西古墳群	34	本庄川流域条里制遺跡	60	ガンダ遺跡
9	京殿遺跡	35	大塚遺跡	61	藤田南古墳群
10	糞平遺跡	36	たたら古墳群	62	淵古墳群
11	石浦遺跡	37	月光寺遺跡	63	杉戸遺跡
12	五野寺跡	38	上松古墓	64	測切古墳群
13	平田古墳群	39	家床遺跡	65	藤田遺跡
14	金クソ谷遺跡	40	兵ヶ谷古墳群	66	柳瀬遺跡
15	荒船古墳群	41	連行遺跡	67	夫手遺跡
16	荒船遺跡	42	客山墳墓群	68	長海条里制遺跡
17	前田遺跡	43	H19 遺跡	69	善尾遺跡
18	松音寺古墳	44	坂山横穴墓	70	善尾古墳
19	扇ノ平遺跡	45	客山古墳群	71	弁慶森古墳
20	荒神古墳群	46	中西古墳群	72	御供田古墳
21	布自枳美峰跡	47	新川遺跡	73	堀越古墳群
22	原の後遺跡	48	ドロケ遺跡	74	権太作遺跡
23	六田遺跡	49	久羅弥神社遺跡	75	寺の脇遺跡
24	深迫古墳	50	宮島谷古墳群	76	四反田窟跡
25	城山城跡	51	平津遺跡	77	樋尻垣古墳
26	馬場遺跡	52	梅廻古墳群	78	神田古墳群

参考文献

- 松江区教育委員会 1999 『本庄地区京営園地整備事業に伴う松江北東部道路発掘調査報告書』
- 松江区教育委員会 2000 『多角地区ふるさと農道整備事業にともなう夫手遺跡発掘調査報告書』
- 島根県文化財愛護協会 1976 『主要地方道路松江-境線バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅰ』
- 島根県文化財愛護協会 1982 『主要地方道路松江-境線バイパス関係埋蔵文化財報告書Ⅱ』
- 島根県教育委員会 1988 『国道 431 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 祖子分長池古墳』
- 島根県教育委員会 1993 『国道 431 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 八色谷古墳群』
- 島根県教育委員会 1997 『国道 431 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 本庄川流域条里遺跡』
- 島根県教育委員会 1998 『国道 431 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 荒船古墳群・荒船遺跡・本庄川流域条里遺跡（2）』

- 高根県教育委員会 2002 「国道 431 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 馬場遺跡・杉ヶ橋遺跡・客山墳墓群・進行遺跡」
- 高根県教育委員会 2007 「国道 431 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ 東前田遺跡・大谷口遺跡・仲嶺遺跡・金クン谷遺跡 1 区・2 区・3 区」
- 高根県教育委員会 2008 「高根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財報告書 1 恵谷古墳群・岩鼻古墳群・上講武殿山城跡・砥石遺跡・沢下遺跡・元宮遺跡」
- 高根県教育委員会 2009 「高根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財報告書 2 三大寺遺跡」
- 高根県教育委員会 2009 「高根原子力発電所 耐震設計審査指針の改定に伴う地質調査にかかる埋蔵文化財報告書 尾崎遺跡」
- 高根県教育委員会 2008 「高根県教育長埋蔵文化財調査センター年報 16 平成 19 年度」
- 高根県教育委員会 2009 「高根県教育長埋蔵文化財調査センター年報 17 平成 20 年度」

第3章 金クソ谷遺跡4区の調査

第1節 調査の経過と概要

金クソ谷遺跡4区は、中嶺遺跡及び金クソ谷遺跡3区に挟まれた丘陵部分に位置する。平成18年11月に丘陵西斜面のトレンチ調査を実施し、1,200mlの発掘調査必要範囲を確認した。平成20年8月に、丘陵東斜面のトレンチ調査を実施し、最終的に平成18年度に確認した部分(1,200ml)の調査が必要であると判断した。

調査期間は平成20年7月28日から11月20日、調査員1名、調査補助員1名の体制で調査を実施した。調査区は標高50～57mの丘陵尾根から丘陵斜面に位置する。まず丘陵頂部から、北にのびる尾根上に土層堆積状況確認用のベルト(ベルトA)を設定し、さらにベルトAに直交するベルト(ベルトB～E)4本を設定して、掘削を開始した。続いて、南西の尾根の調査を行った。最後に2つの尾根に挟まれた緩斜面の中央に、等高線に直交するベルト(ベルトC)を設定して調査を実施した。調査では北にのびる丘陵の西斜面で遺物包含層が、丘陵緩斜面において土坑3基、ピット9基がそれぞれ検出された。11月17日に空中写真撮影を実施し、調査を終了した。

丘陵の尾根上部分(ベルトA)の土層堆積状況は、上層が表土層(地山風化部分から基盤層に達する新移層を含む)、そして基盤層(地山)となっている。北端部分の平坦部は、近代以降の陶磁器が出土しており、近代以降に削平された可能性が考えられる。尾根西斜面の、ベルトB第2層は遺物包含層である。第3層及び第4層は、一連の層位で、丘陵緩斜面のベルトC第3層に対応していると考えられる。

第2節 遺構と遺物

第9図は遺構の実測図である。

SX01及びSX02以外の遺構は、調査区中央の緩斜面部で検出した。遺構の検出面は、ベルトC土層断面図の第1層及び第3層の下面である。SX01及びSX02は、ベルトA土層断面図の第3層下面で検出している。この層からは近代以降の遺物が出土しており、近代以降の土抗と考えられる。

P01、P02は直径20cm、深さ20cmのピットである。P03は長軸40cm、短軸20cmの平面楕円形、深さ20cmのピットである。P01からP04は、調査区中央の北よりの部分で検出されており、埋土は炭化物片を含む褐色土である。P05からP13及びSK01は、調査区中央から南よりの部分で検出されている。P05からP13は、P01からP04同様、埋土は炭化物片を含む褐色土である。

第11図は、4区から出土した遺物の実測図である。

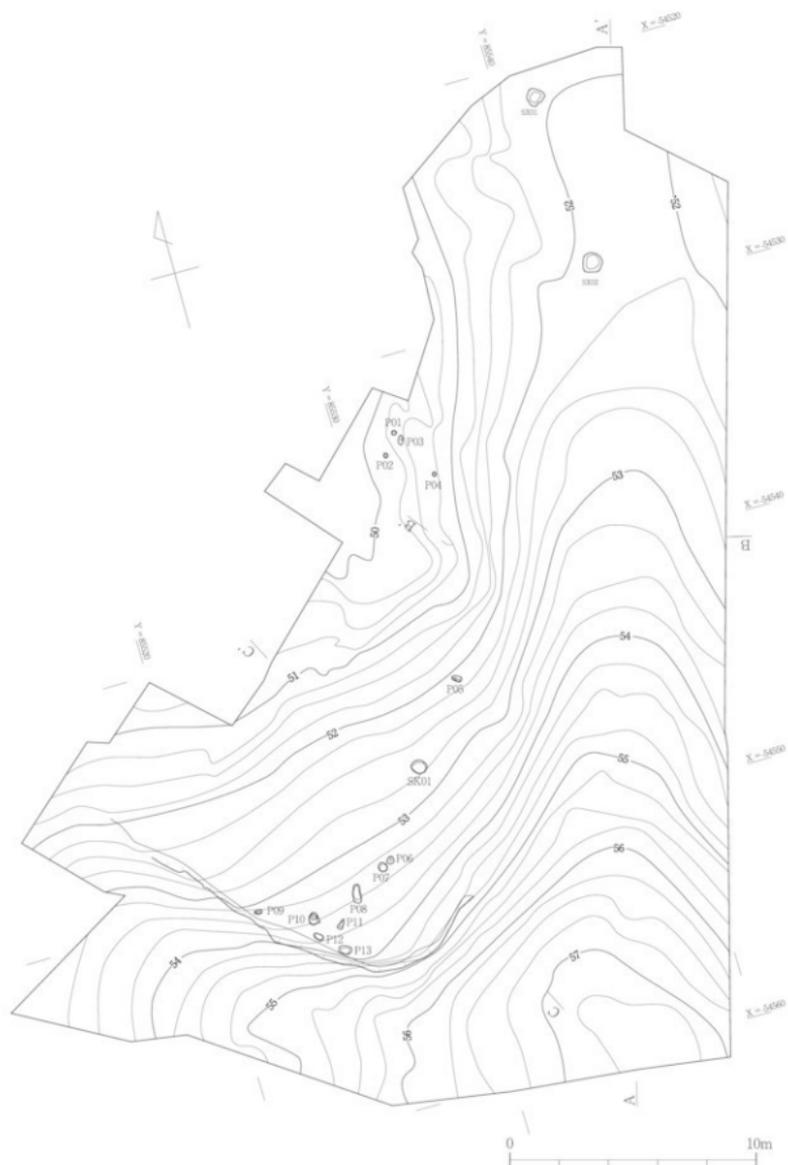
1は土師器片と考えられる。2から6は須恵器である。2、3は坏の口縁部である。2は高広編年ⅡA期と考えられる。4は高台の付く坏の底部である。高広編年ⅣB期と考えられる。3と4は同一個体と考えられる。5は高台の付く皿で、色調は灰白色を呈している。高広編年ⅣAもしくはⅣB期と考えられる。4、5、6、8はベルトAを設定した尾根の西側斜面から出土している。(第10図網掛け部分)6は甕の肩部である。7は土師質土器である。坏もしくは皿の底部と考えられる。8から11は石製品である。8は、器種不明の直方体状の石製品である。9は玄武岩製磨製石斧片



第4図 金クソ谷遺跡4区位置図 (S=1/2500)



第5図 金クソ谷遺跡4区調査前測量図 (S=1/300)



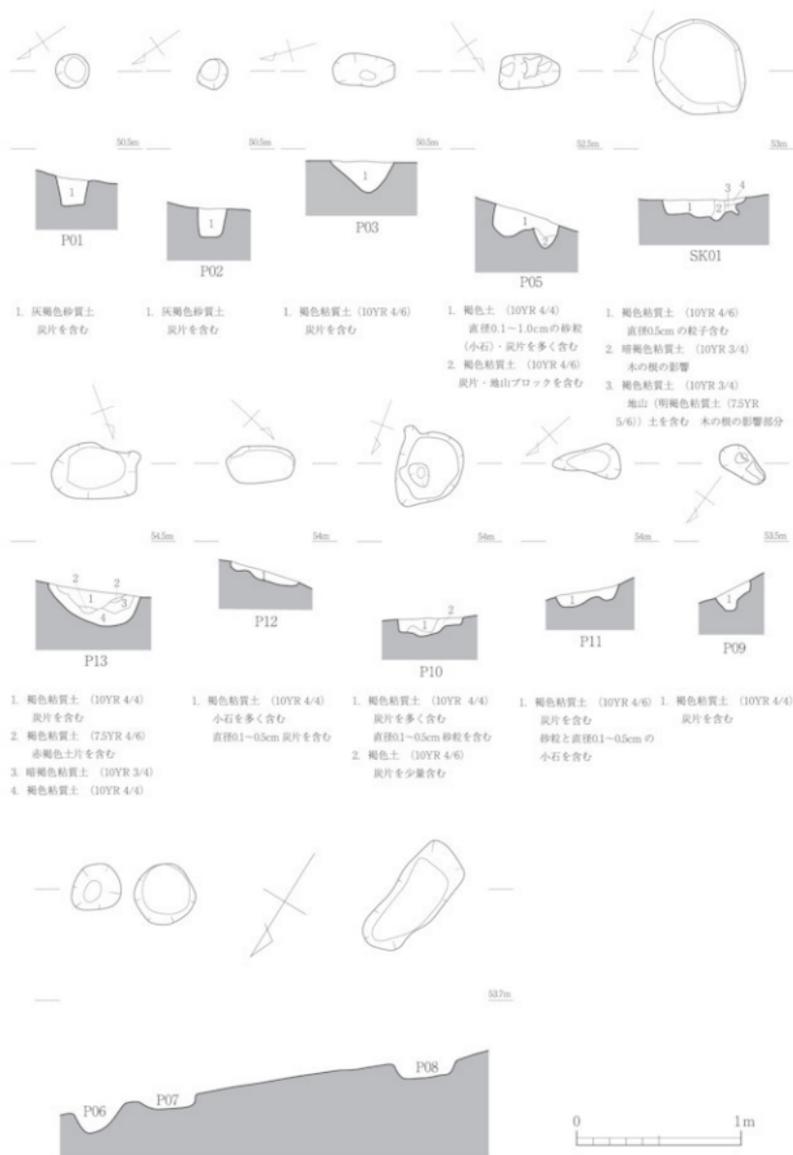
第6図 金クソ谷4区遺構配置図 (S=1/200)



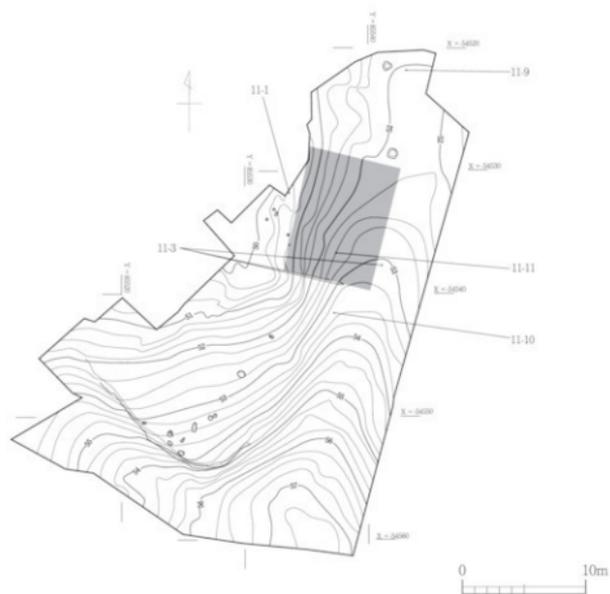
第7図 金クソ遺跡4区ベルトA土層断面図 (S=1/60)



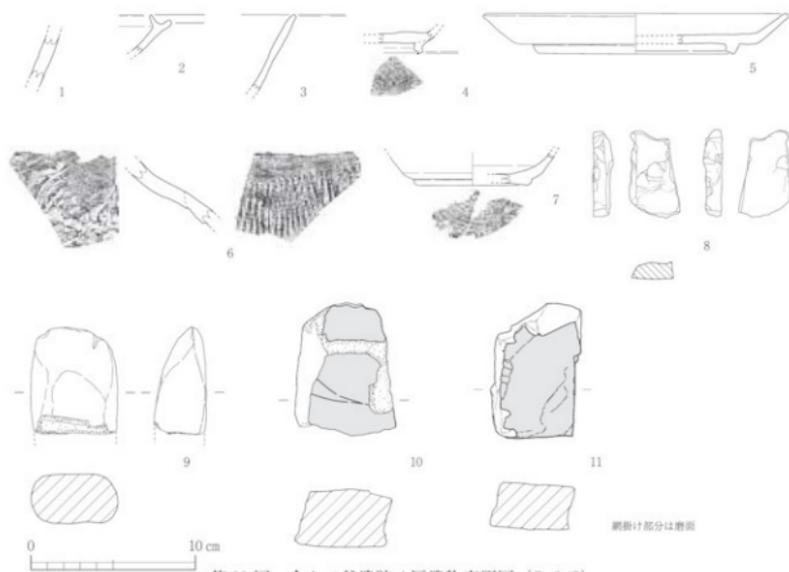
第8図 金クソ遺跡4区ベルトB・C土層断面図 (S=1/60)



第9図 金クソ谷遺跡4区遺構実測図(S=1/30)



第10図 金クソ谷4区遺物出土状況図 (S=1/400)



第11図 金クソ谷遺跡4区遺物実測図 (S=1/3)

検出番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	調整・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11-1	-	土師器	-	-	-	外面：- 内面：-	直径約1～2mmの粒子を含む	良好	明黄褐色	
11-2	-	須恵器	坏	9.8	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	1mm以下の砂粒（灰白色粒子）を含む	良好	灰白色	
11-3	-	須恵器	坏	15.6	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	1mm以下の白砂を含む	良好	灰色	
11-4	-	須恵器	高台付 坏	-	-	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	1mm以下の砂粒（白色粒子）を含む	良好	灰色	
11-5	-	須恵器	高台付 皿	18.2	2.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・不定ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む	やや良好	灰白色	
11-6	-	須恵器	甕	-	-	外面：回転ナデ・タタキ 内面：同心円タタキ・指ナデ	1mm以下の砂粒（白色粒子・黒色物質）を含む	良好	灰白色	
11-7	-	土師質 土器	皿	-	-	外面：回転ナデ・回転系切 内面：回転ナデ	1mm以下の白砂を含む	やや良好	褐色	

表2 金クソ谷遺跡4区出土土器観察表

検出番号	出土地点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
11-8	-	石器	-	3.5	3.1	0.7	7.1	-	
11-9	-	石器	磨製両刃石斧	6.5	5.3	3.0	163.7	玄武岩	先端部が欠損しており、破面に磨面が確認できる。
11-10	-	石製品	砥石	8.1	6.0	5.2	303.4	流紋岩	
11-11	-	石製品	砥石	8.2	5.1	4.2	211.1	流紋岩	

表3 金クソ谷遺跡4区出土石製品観察表

検出番号	調査区	出土地点	層位	名称	初出年代	備考
11-12	-	-	-	寛永通寶	-	新寛永*

表4 金クソ谷遺跡4区出土古銭観察表

である。先端部が欠損しており、破面に磨面が確認できる。10及び11は流紋岩製砥石である。その他銅製の寛永通寶が出土している。(写真図版)

第3節 総括

金クソ谷遺跡4区中央部の緩斜面部分では、ピット及び土坑が検出された。土層堆積状況及び遺物出土状況から上限は8世紀後半と考えられるが、ピット、土坑以外は顕著な遺構が検出されなかったため遺跡の性格は特定できなかった。

第4章 一の谷古墳の調査

第1節 調査の経過と概要

一の谷遺跡は、松江市西川津町の大内谷おうちうらにと同市下東川津町祖子分そしよぶに挟まれた丘陵部分に位置する。一の谷古墳の東約100mに位置した祖子分長池古墳の調査時（昭和62年）に確認された。

調査期間は平成21年5月20日から11月6日で、調査員1名、調査補助員2名の体制で調査を実施した。調査は、一の谷古墳を中心に、古墳の南西に位置する墳丘状の高まり部分、切通し部分、及び苜蓿古墳の位置した丘陵頂部へとつづく斜面部分の調査を計画した。初めに調査区内の草刈りを実施して、その後墳丘及び周辺の調査前地形測量を実施した。

古墳の中心を基点とする5mのグリッドを設定して調査を開始した。古墳の中心から北西に20m、北東に25mの地点をA0として、南東方向をアルファベット（A、B、C）、南西方向を数字（0、1、2）でそれぞれ表示するよう設定した。またグリッドの北端の交点部分の表示をグリッド番号とするよう設定した。（第13図一の谷古墳遺構配置図参照）古墳の中心（E5）を通る十文字のグリッドに沿って、土層断面観察のためのベルトを幅50cmで設定し、さらにベルトの南及び東に50cmから1m幅のトレンチを設定して、そのトレンチから掘削を開始した。その後、ベルトで層位を確認しながら、墳丘面まで掘削を行った。墳丘面検出作業と並行しながら、墳頂部では、主体部の検出作業を行った。墳頂部やや東より部分に、主体部を1基検出し、縦断及び横断のベルトを残しながら掘削を開始した。主体部の調査では、鉄鍬、被覆粘土、棺床粘土、枕石を検出した。

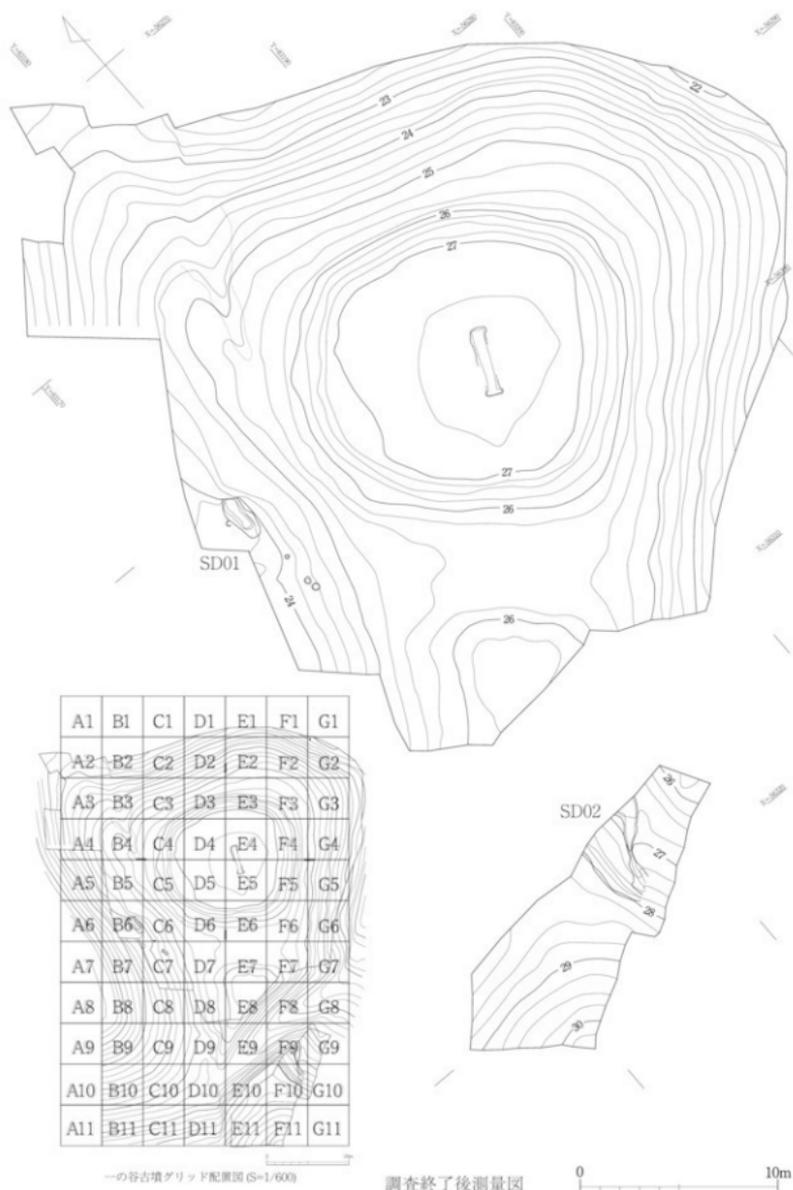
また一の谷古墳の調査と並行して、古墳の南西に位置する墳丘状の高まり部分（仮2号墳）と切通し部分の調査を行った。仮2号墳に対しても、墳頂と考えられる部分を基点に、L字状のベルト、トレンチを設定して調査を開始した。仮2号墳の南側は、切通し部分で削平を受けており、土層断面の確認も含めて、切通し法面の掘削も仮2号墳の調査と併せて行ったが古墳と判断するにはいたらなかった。

以上の調査中の8月上旬から9月中旬にかけて、調査指導会を6回実施した。9月中旬には古墳に設定したベルトの確認及び記録作業を行い、墳裾を確認した。その後、表土及び墳丘流失土を完掘して墳丘の検出作業を終了した。さらに9月18日に空中撮影を行い、9月19日に西川津町に所在する古屋敷Ⅱ遺跡（松江島根線に伴う埋蔵文化財発掘調査）と併せて現地説明会を実施した。現地説明会終了後は、墳丘検出面の地形測量を行い、主体部の完掘作業、墳頂部盛土の掘削作業、古墳周辺の掘削を行った。墳頂部では、盛土直下に黒色土が検出され、この黒色土から弥生時代後期の土器が出土した。古墳以外では、西斜面において、溝状の落ち込み（SD01）、ピットが検出された。切通しを挟んだ南西側においても、溝状遺構（SD02）が検出され、調査を行った。最終的に古墳部分については、主体部、盛土及び旧表土を掘削し、調査終了後の地形測量を行い、現地調査を終了した。

調査区内の基本層序は、上層から表土、地山風化土、地山となっている。



第12図 一の谷墳調査区位置図 (S=1/1000)



第13図 一の谷墳遺構配置図 (S=1/250)



第14図 菊捨古墳・一の谷古墳調査前測量図 (S=1/600)

第2節 遺構と遺物

1 一の谷古墳

〔墳丘〕(第14～18図)

一の谷古墳は、大内谷と祖子分の谷に挟まれた、南東から北西にのびる丘陵に位置する。丘陵上の一つの頂部である標高41mに苜捨古墳が位置し、そこから北東に派生する丘陵端部の標高28mの位置に一の谷古墳は築造されていた。測量の結果、北西及び北東側は円形、南東から南西側は方形を呈し、不正形な円墳の形状をしていると判断した。墳丘は東西18.5m、南北18m、南側からの裾から墳頂部までの高さは2mを測る。築造にあたっては、苜捨古墳から丘陵が続く南西斜面は掘削により地形の大幅な改変が行われているが、そのほかの斜面は現地形を有効に利用していると考えられる。古墳からは、真東に嵩山山頂を、眼下には祖子分の谷を望むことができる。谷からの標高差は20mである。

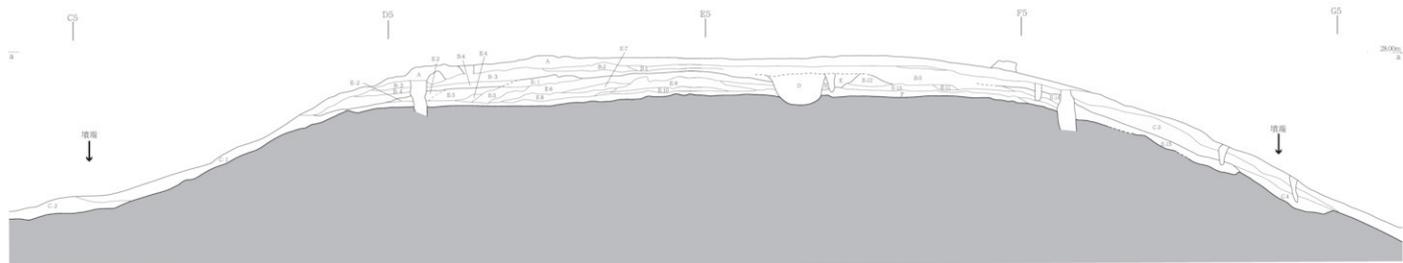
発掘調査の結果、調査以前の測量図と同様に、北西及び北東側は円墳状、南東から南西側は方形の不正形な古墳であることが確認された。規模は東西19m、南北16.5mである。古墳が集落を意識して築造されたものとする和一の谷古墳の北側にある谷水田部であろうから、こちらからみた景観が重視される。つまり古墳の南東から南西側の方形の部分は集落からはみえないので、円墳として築かれた可能性が高いと考えられる。このことが墳形を不正円形にした原因であろう。以下は、表土及び流失土掘削後の墳丘を検出した状況について記載する。(第17図一の谷古墳墳丘測量図) 墳裾には平坦面が構築されていた。墳裾平坦面の規模は、南西斜面で4m、北西斜面で2m、北東斜面で2mであり、南東斜面は後世の崩落などにより1m未満であった。墳丘規模は墳丘裾部分で、北東から南西方向は17m、北西から南東方向は19m、高さは1.5mであった。墳頂平坦面は、北東から南西方向は9.5m、北西から南東方向は10mであった。墳丘は基本的に、墳丘斜面及び墳裾は地山を削りだして、墳頂部は盛土を施して構築されている。墳丘南西斜面付近は、墳丘の成形及び墳裾平坦面成形のためかなりの地山部分が掘削され、平坦面が成形されたと推測される。墳頂部の層序は、表土下に、木の根などの影響により盛土かどうか判断できない第B層が堆積していた。第B層下は、盛土層(第E層)、旧表土などと考えられる第F層、そして地山となっていた。後述するが、墓壇は第E層上面付近から掘削され、埋葬後主体部周辺から盛土されたと推測される。また主体部付近の第F層直下は、岩盤層が比較的高いレベルで展開していた。第18図は盛土掘削後の黒色土(旧表土)の広がりを示した図である。

〔主体部〕(第19～21図)

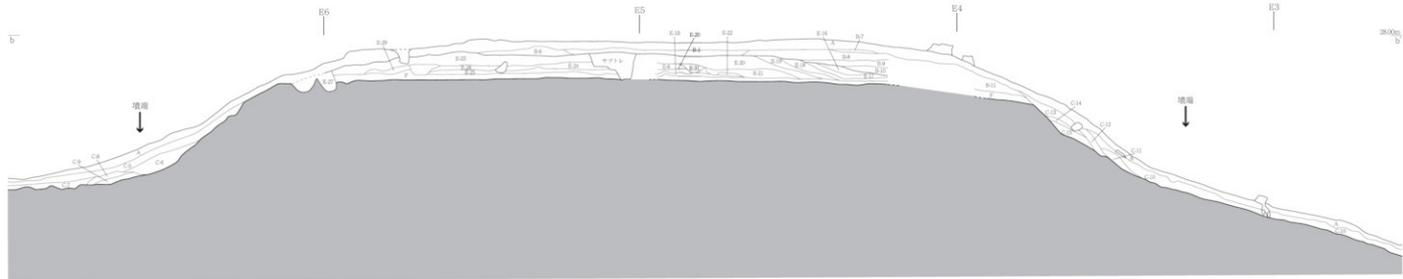
主体部は、墳頂平坦面の南東寄り部分に位置している。木棺の腐朽に伴う落ち込みが盛土層(第E層)の上面付近で検出された。土層堆積確認用ベルトを残しながら掘削を行い、第3層の中ほど(標高27.7m)で、墓壇の掘り方に伴うプランが部分的に検出された。墓壇のプランが部分的にしか検出できなかった理由としては以下のとおりである。墓壇を掘削した面は盛土面(第16図・第E層)であり、埋葬後同じ土を利用して盛土をしている。つまり墓壇を検出する面と墓壇の埋土(第16図・第C層)が同質の土であったため墓壇の検出作業が困難となり、墓壇の掘り方は部分的にしか検出されなかった。墓壇の底は断面U字状に掘削されている。長さ、3.54m、幅0.60m、深さ0.50mで、両小口部分は、平面T字状に側面に突き出した状態である。その幅は、北東端0.91m、南西



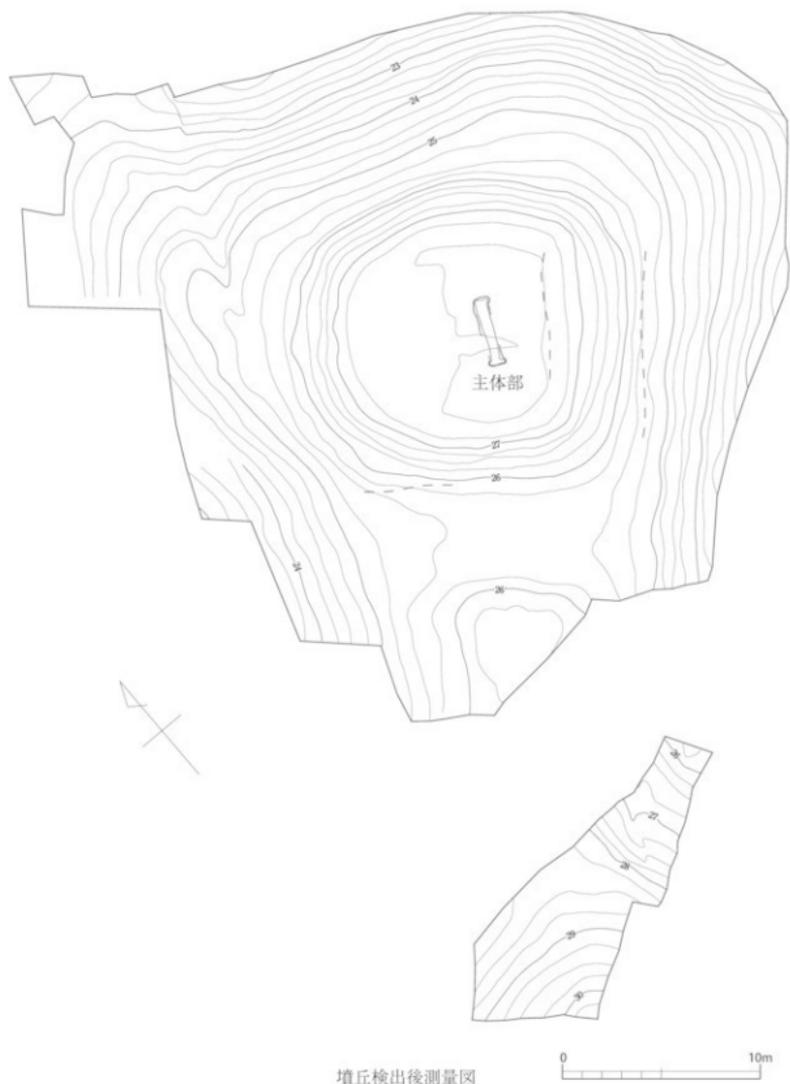
第15図 一の谷古墳調査前測量図 (S=1/250)



- | | | | |
|--|-------------------------------|---|--|
| A 黄土 | C-4 赤褐色土 (2SYR 4/6 - 5YR 4/8) | E-3 褐色土 (2.5YR 6/8) 5cm以下のレキを均等に含む。東から西へレキが混ぶ部分が見られる。 | E-18 褐色土 (5YR 6/8) 5cm以下のレキを多く含んでいる。 |
| B-1 褐色土 (7.5YR 6/6) | C-5 赤褐色土 (5YR 3/4) | E-4 褐色土 | E-19 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) レキをあまり含んでいない。 |
| B-2 褐色土 (7.5YR 6/6) | C-6 赤褐色土 (2.5YR 4/6) | E-5 褐色土 (2.5YR 6/6) 5cm以下のレキを均等に含む。東から西へレキが混ぶ部分が見られる。 | E-20 褐色土 (5YR 6/8) 5cm以下のレキを多く含んでいる。 |
| B-3 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) 木の根の影響があり、またにおい色調を呈している。 | C-7 赤褐色土 | E-6 褐色土 (2.5YR 6/6) 5cm以下のレキを均等に含む。東から西へレキが混ぶ部分が見られる。 | E-21 褐色土 (5YR 6/8) 5cm以下のレキを多く含んでいる。 |
| B-4 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) E1層に比べややしまりがなく、E1層の黄土の可能性あり。 | C-8 赤褐色土 | E-7 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) 5cm以下のレキを均等に含む。東から西へレキが混ぶ部分が見られる。 | E-22 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) |
| B-5 明赤褐色土 (5YR 5/8) | C-9 赤褐色土 | E-8 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) 5cm以下のレキを均等に含む。東から西へレキが混ぶ部分が見られる。 | E-23 明赤褐色土 (5YR 5/8) におい色調を呈している。また木の根の影響が入っている。 |
| B-6 明赤褐色土 | C-10 赤褐色土 | E-9 褐色土 (2.5YR 6/8) 2cm程度の小さなレキを少し含んでいる。 | E-24 褐色土 (2.5YR 6/8) |
| B-7 明赤褐色土 | C-11 赤褐色土 | E-10 赤土 (10YR 5/8) レキを少し含んでいる。色調が強く粘性が強い層である。 | E-25 褐色土 (2.5YR 6/8) |
| B-8 明赤褐色土 | C-12 赤褐色土 | E-11 におい赤褐色土 (5YR 4/3) B5層が黒色に変化した土が部分的に堆積している。 | E-26 明赤褐色土 |
| B-9 明赤褐色土 (5YR 5/6) 小さいレキを少し含んでいる。 | C-13 赤褐色土 | E-12 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) 小さいレキが均等に含まれている。 | E-27 赤褐色土 (5YR 4/6) |
| B-10 明赤褐色土 (5YR 5/6) 小さいレキを少し含んでいる。 | C-14 赤褐色土 | E-13 赤褐色土 (2.5YR 4/6) レキを含んでいる。 | E-28 |
| B-11 明赤褐色土 | C-15 赤褐色土 | E-14 赤褐色土 (2.5YR 4/6) 黒色ブロックを含んでいる。 | E-29 |
| C-1 赤褐色土 (2.5YR 4/6) | D 主体部黄土 | E-15 褐色土 (2.5YR 6/8) 5cm以下のレキを多く含んでいる。 | E-30 |
| C-2 赤褐色土 (5YR 4/8) | E-1 明赤褐色土 (2.5YR 5/8) | E-16 褐色土 (5YR 6/8) 5cm以下のレキを多く含んでいる。 | E-31 |
| C-3 赤褐色土 | E-2 褐色土 | E-17 明赤褐色土 (7.5YR 5/8) 5cm以下のレキを多く含んでいる。 | F 黒色土 |

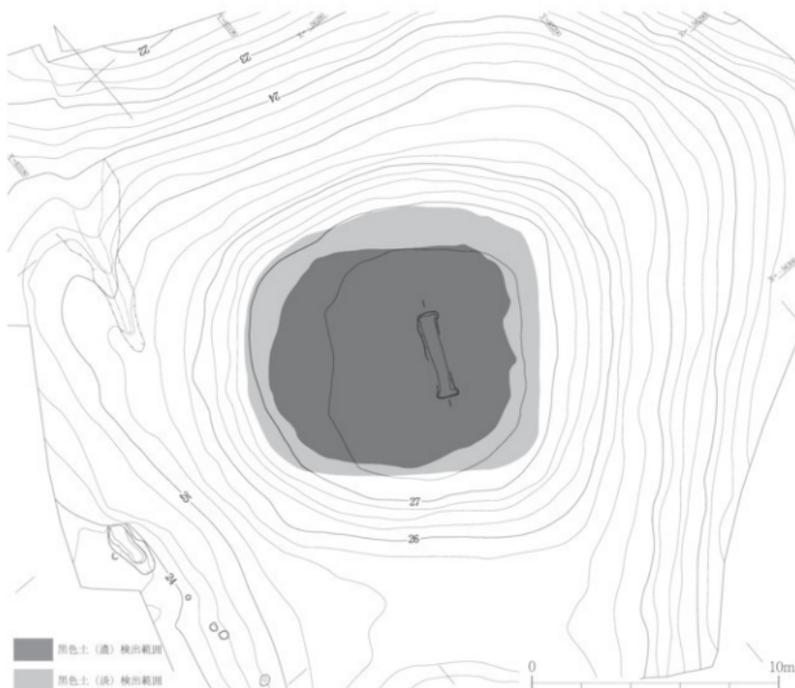


第16図 一の谷古墳墳丘土層図 (S=1/60)



墳丘検出後測量図

第17図 一の谷古墳墳丘測量図 (S=1/250)

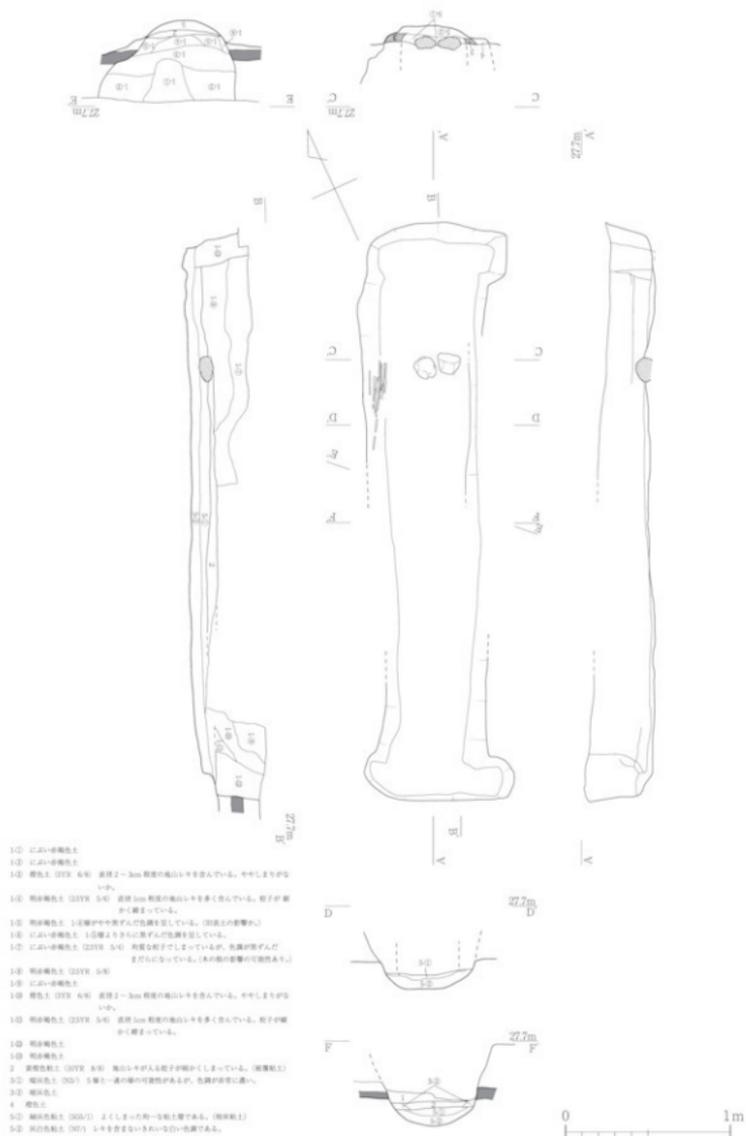


第18図 一の谷墳黒色土検出範囲図 (S=1/200)

端 0.85 mである。墓壇の内幅は、北東側で 0.55 m、南西側で 0.40 mであり北東側がやや広がっており、また底の高さも、南西側より南東側が 5 cm 程度高くなっている。北東側に枕石が設置してあることと併せて考えると、北東側が頭位と考えられる。墓壇の主軸は N - 25° - E である。土層堆積状況は、第 1 層が木棺の腐朽に伴う盛土の流入土、第 2 層が木棺上面の被覆粘土層、第 3 層が側板を固定するための裏込め土、第 5 層が棺床粘土である。木棺の構造は両側板を小口板で挟む構造の組合式木棺と推測され、規模は、長さ 3.1 m、幅 0.40 m と考えられる。蓋板の上面には被覆粘土が貼られていたと考えられるが、両側板の外側に被覆粘土が覆っていたかは不明である。棺床粘土上では枕石が 2 個検出された。また鉄鍬 14 本が墓壇内の枕石の西 20 cm の位置から出土した。この位置は、木棺床からステップ状に一段高くなっており、木棺の外と考えられる。出土状況から鉄鍬は、墓壇に木棺を設置した後墓壇内の木棺横（北西）に副葬されたと考えられる。（粘土槌を想定した場合棚外と考えられる。）鍬身部はすべて北東方向を向き、ほぼ 1 か所でまとめて出土していたが、鋒の位置は 10 cm 位の幅があり、1 点 (22 - 8) は約 30 cm 離れた状態で出土していた。取り上げ後の観察により、鉄鍬は有機質の紐もしくは布状の物質で束ねられていたと推測される。

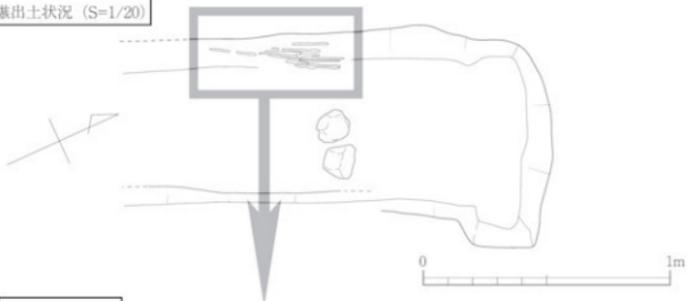
[出土遺物] (第 22、23 図)

一の谷墳の調査中に出土した遺物は、墳丘北西斜面表土層の土師器細片 1 点及び主体部の鉄鍬

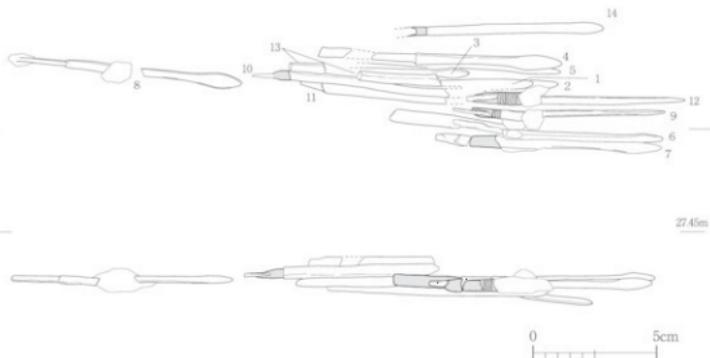


第19図 一の谷古墳主体部実測図1 (S=1/30)

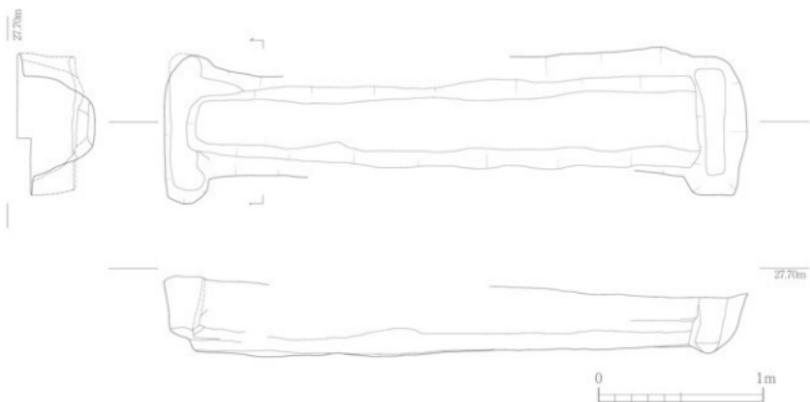
鉄器出土状況 (S=1/20)



拡大図 (S=1/2)



第20図 一の谷古墳鉄器出土状況図 (遺構 S=1/20・遺物 S=1/2)



第21図 一の谷古墳主体部実測図2 (S=1/30)

14本である。土師器片については、墳丘第F層から弥生土器が出土していることから、弥生土器の可能性も考えられる。

鉄鎌は、一か所からはほぼまとまって14本出土した。1から5及び6と7は錆による接合がみられた。すべての鉄鎌は鎌身部長が28～3.3cm、頸部長が9.2～10.5cmの間におさまり、長頸鎌である。23・12以外の鉄鎌には、矢柄と考えられる木質が錆のため遺存していた。23・12の茎部分には矢柄との接合のため巻きつけられた糸が確認できるため、全ての鉄鎌は、矢柄を装着した状態で副葬されていたと推測される。鉄鎌の特徴は以下のとおりである。全体としては鎌身に逆刺は無く、頸部間は無間もしくは茎部分との境にわずかに段差がある角間と考えられる。また22-1、3、6、23-14の刃部に、鑄（片鑄）が調整されていると考えられる。全長及び鎌身の形状は、それぞれ若干の個体差があると考えられる。茎部分の肉眼及び顕微鏡観察の結果は以下のとおりである。最外部は、光沢のある銜色を呈する部分が確認でき、漆と推測される。その内側は、帯状の有機材、矢柄と考えられる木質部分、茎部分の直上は糸状の繊維質が確認できる。よって鉄鎌と矢柄の接合手順は、まず茎部分に糸を巻き、矢柄を差し込み、幅数ミリの帯状有機材で上から巻き、最後に漆を塗ったことが推測される。

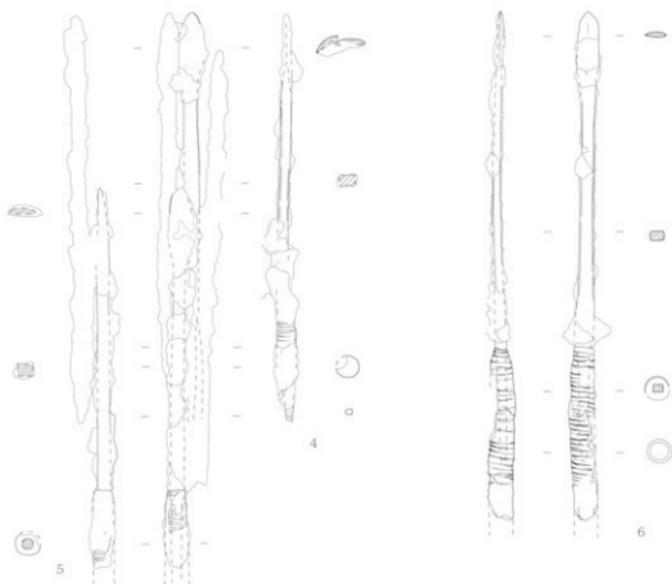
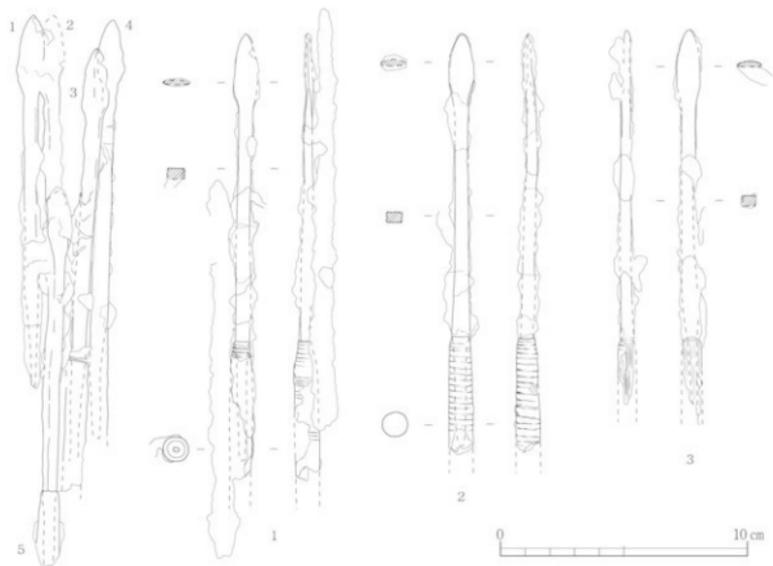
2. その他の遺構

[SD01・ピット] (第24、25図)

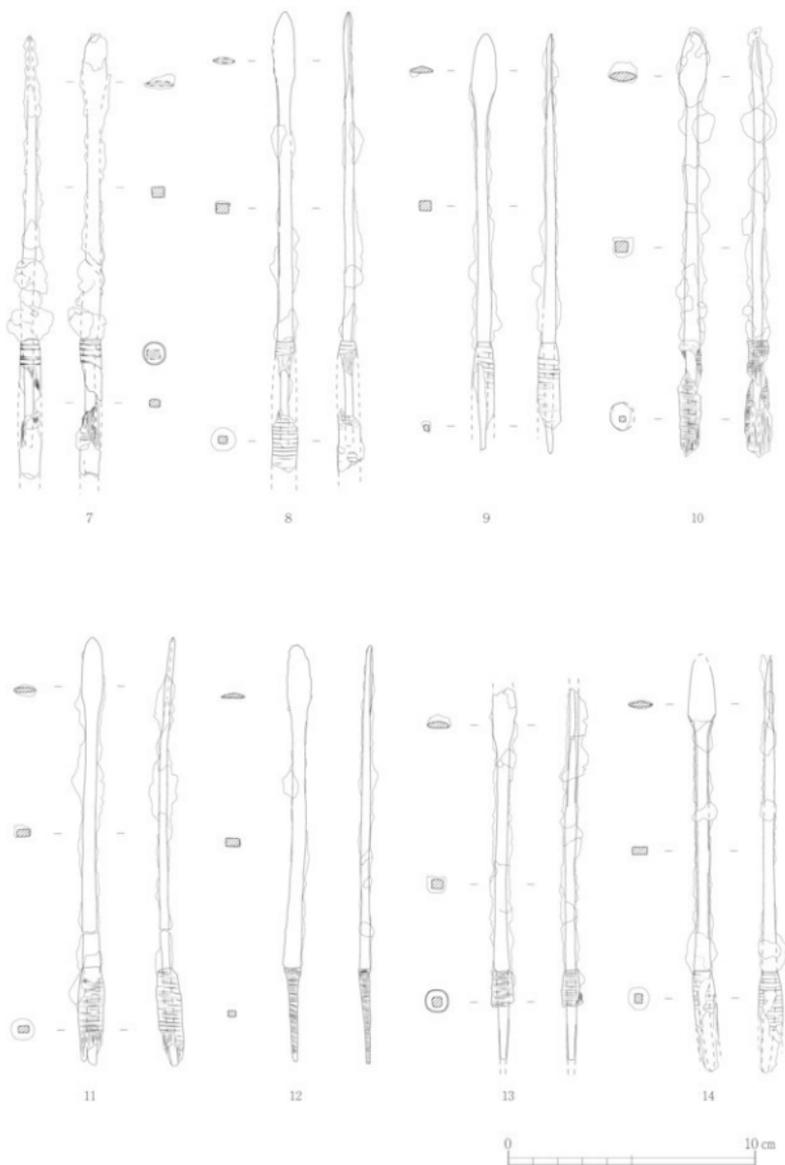
一の谷古墳の西斜面、標高24m付近に位置する。P05以外は、古墳築造以後に堆積したと考えられる層を掘削した後検出した。SD01は長さ20m、幅1.0m、深さ30cmの、溝状の窪み

標図番号	器種	出土地点	全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃幅 (cm)	頸部 (cm)	刃部厚 (cm)	頸厚 (cm)	鎌身部+ 頸部(cm)	重量 (g)
22 - 1	鉄鎌	主体部	18.2	2.2	1.0	0.55	0.3	(0.45)	12.6	73.35
22 - 2	鉄鎌	主体部	17.4	2.0	1.0	0.7	0.4	0.2	12.3	
22 - 3	鉄鎌	主体部	15.6	2.2	1.2	0.7	0.35	(0.5)	12.7	
22 - 4	鉄鎌	主体部	15.3	2.3	1.1	0.55	0.3	0.4	11.5	
22 - 5	鉄鎌	主体部	16.7	2.0	1.1	0.6	0.25	(0.4)	(12.5)	
22 - 6	鉄鎌	主体部	18.4	2.6	0.9	0.6	0.2	0.3	13.6	31.95
22 - 7	鉄鎌	主体部	16.8	2.0	1.0	0.5	0.25	0.3	12.4	
22 - 8	鉄鎌	主体部	17.7	2.6	0.9	0.5	0.3	0.4	13.5	12.77
22 - 9	鉄鎌	主体部	17.1	2.7	1.1	0.5	0.25	0.25	12.5	12.49
22 - 10	鉄鎌	主体部	17.1	2.0	1.05	0.4	0.3	0.2	12.8	15.93
23 - 11	鉄鎌	主体部	17.5	2.7	0.85	0.5	0.3	0.4	13.5	14.34
23 - 12	鉄鎌	主体部	17.1	2.1	1.0	0.5	0.15	0.4	13.0	8.89
23 - 13	鉄鎌	主体部	15.1	1.0	0.9	0.4	0.3	0.4	-	12.30
23 - 14	鉄鎌	主体部	17.1	2.5	1.0	0.6	0.25	0.4	12.8	13.00

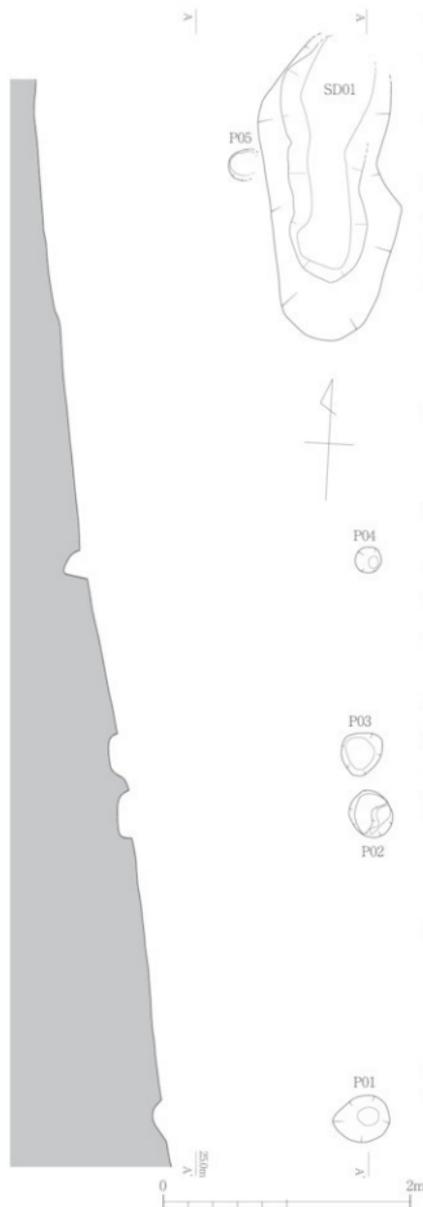
表5 一の谷古墳出土鉄器観察表



第22図 一の谷古墳出土鉄鏃実測図1 (S=1/2)



第23図 一の谷古墳出土鉄鍔実測図2 (S=1/2)



第24図 一の谷古墳SD01・ピット実測図 (S=1/40)

である。SD01とピットは一の谷古墳第F層と同様な黒色土が堆積していた。P05及びSD01から甕(25-1、2、3)が出土している。25-1は、器台の受け部と考えられる。口縁部には、擬凹線文が施されている。2は甕で、口縁部には凹線文、肩部には、列点文が施されている。3は甕の口縁部と考えられ、凹線文が施されている。時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。遺構の性格は不明である。

【SD02】(第26図)

一の谷古墳の南西、標高26～27mの丘陵斜面に位置する。長さ4.0m、幅2.0m、深さ20cmの遺構である。遺構の時期及び性格は、不明である。

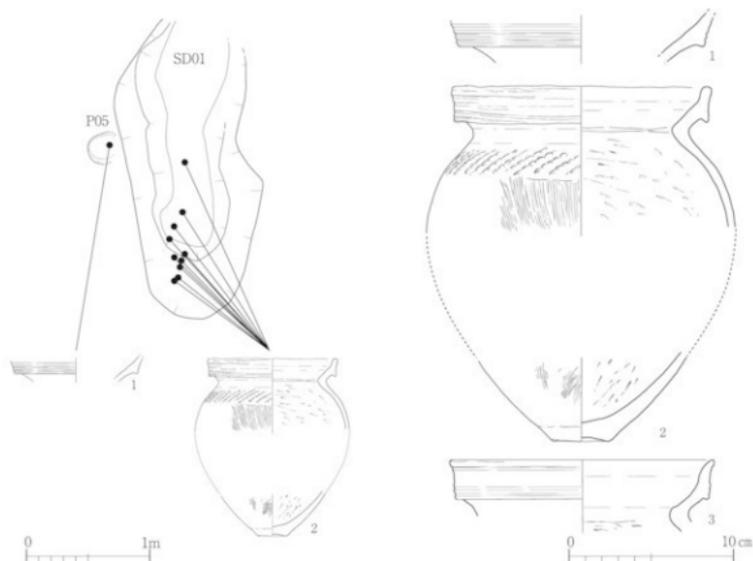
【切通し遺構】

調査区南西部分、SD02の北に位置している。丘陵尾根を東西に横断するように、断面V字状に掘削されている。長さ20m、最大幅8m、深さ2mの規模で、最近まで山道として利用されていたようである。一の谷古墳が位置する丘陵部は、中世城郭の堂頭山城跡に比定されているが、この切通し遺構が、中世の時期まで遡るかは不明である。表土掘削中に土器(第27図6)が出土している。

切通し遺構の北斜面は、一の谷古墳の南西に位置する墳丘状の高まり部分にかかっており、墳墓の確認のため土層堆積状況の確認を行った。その結果、主体部や盛土などは確認されず、墳墓の痕跡は検出されなかった。

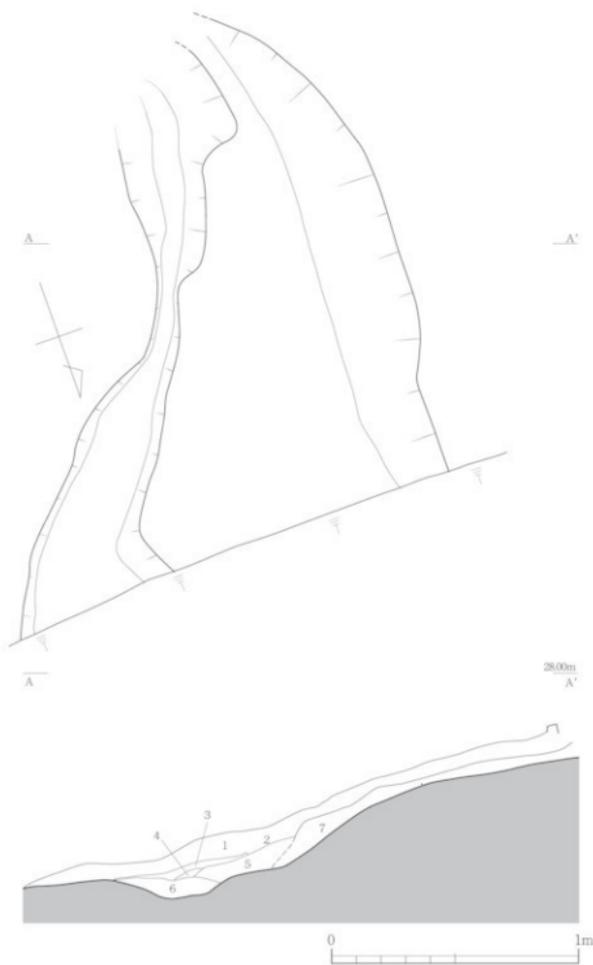
3. 遺構に伴わない遺物(第27図)

1、2は甕の口縁部から頭部にかけての破片である。3は器種不明で、外面には沈線文、柳描文が施されており、内面はケズリである。1～3は一の谷古墳墳頂の第F層から出土している。全体的に風化が激しい。弥生時代後期の土器である。4は甕類の口縁部である。全体的に風化が激しいが、外面に擬凹線文が



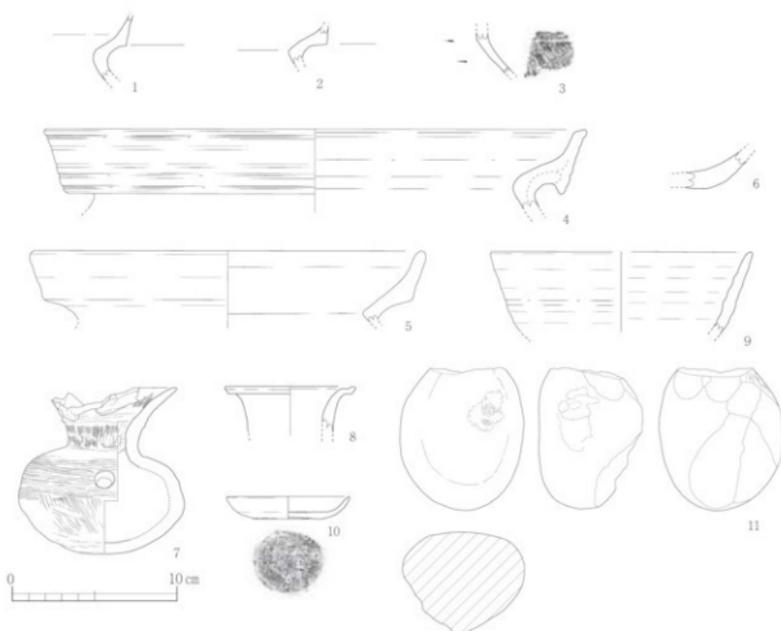
第25図 一の谷古墳SD01・P05出土遺物実測図（遺構S=1:40・遺物S=1/3）

施されている。G 6で出土している。5は土器の口縁部である。風化が激しく調整等は不明である。C 7で出土している。4及び5は比重が重く、また風化状況などに共通点がみられる。6は土器の底部である。切通し遺構南壁付近を掘削中に出土した。7は須恵器の甕である。口縁部に波状文が施されており、胴部にはカキ目が残る。口縁部径に比べて胴部最大径が大きく、全体的にやや粗い作りであり、底部には粘土で閉塞した痕跡が残っている。焼成は良く、口縁部付近の破面は赤褐色を呈している。須恵邑編年TK 208型式併行期もしくはそれ以前の時期の須恵器と特徴が似ており、5世紀中葉頃の可能性が考えられる。C 7で出土している。8は須恵器の甕などの口縁部と考えられる。E 11で出土している。9は坏の口縁部で、8世紀後半以降と考えられる。E 7で出土している。10は土師質土器の皿である。D 2で出土している。



1. 暗褐色土 (10YR 4/6) 根を多く含む
2. 赤褐色粘質土 (5YR 4/6)
3. 赤褐色土 (5YR 4/6) 根を多く含む
4. 暗オリーブ灰色粘質 (2.5GY 4/7) 根の影響による層
5. 赤褐色粘質土 (5YR 4/6)
6. 明褐色土 (7.5YR 5/6) ばさばさしている
7. 赤褐色粘質土 (5YR 4/8) 根を多く含む (地山か)

第 26 図 一の谷古墳 SD02 実測図 (S=1/20)



第27図 一の谷墳出土遺物実測図 (S=1/3)

検出番号	出土地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	調整・手込の有無	加工	装束	色調	備考
25-1	P 05	弥生土器	甕	—	—	内面： 内面：	磨削が多い 石堀	良好	黄褐色	
25-2	S D 0 1	弥生土器	甕	160	—	内面： 刺突の跡ナシ・ハナジ 内面： ナズリ	1mm程の粒多し	良好	褐色	
25-3	S D 0 1	弥生土器	甕	162	—	内面： 内面： ナズリ	1～2mmの粒が多い	良好	淡黄褐色	
25-1	磯原市	弥生土器	甕類	—	—	内面： 黄泥のため不明 内面： 黄泥のため不明	1～2mmの粒を食む			
25-2	磯原市	弥生土器	甕類	—	—	内面： 黄泥のため不明 内面： 黄泥のため不明	1～2mmの粒を食む			
25-3	磯原市	弥生土器	甕類	—	—	内面： 黄泥のため不明 内面： ハナナズリ	1mmの粒多し（石堀） を食む			
25-4	G 6	弥生土器	甕類	330	—	内面： 黄泥のため不明 内面： 黄泥のため不明	1～2mm程の粒が多い	良好	淡黄褐色	
25-5	C 7	弥生土器	甕類	211	—	内面： 黄泥のため不明 内面： 黄泥のため不明	1mm程の粒多し	良好	黄褐色	
25-6	切通し遺構	弥生土器	甕類	—	—	内面： 黄泥のため不明 内面： 黄泥のため不明	1～3mmの粒を食む			
25-7	C 7	弥生土器	甕	8.8	10.3	内面： 糸鼻のナズリ・ハナナジ 内面：		やや 不良	灰白色・灰白色（調 子ナシ）	
25-8	W 1 1	弥生土器	甕	8.8	—	内面： 内面：	磨削わずかに食む	良好	灰色	
25-9	W 7	弥生土器	甕	18.1	—	内面： オサ 内面： オサ	磨削わずかに食む	良好	灰色	
25-10	B 4	土師器土器	甕	7.5	1.4	内面： 同部赤ナリ 内面：	磨削わずかに食む	良好	淡黄褐色	

表6 一の谷墳出土土器観察表

検出番号	出土地点	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
27-1-1	—	流石	8.9	7.3	0.3	55.6	石	

表7 一の谷墳出土石製品観察表

第3節 総括

1. 一の谷古墳出土鉄鎌について

一の谷古墳では、主体部から14本の鉄鎌が出土した。それぞれ細かい個体差はあるものの、先述したとおり長頸鎌に分類される。錆びた状態であり、また欠損しているものもあるので全体の把握は困難である。したがって鎌身部の形状、鎌身部と頸部の長さをもとに分類を試みる。

○鎌身部の特徴

ア) 鑿

鎌身部の形状により鎌身部片面に鑿を持つ鉄鎌は1、6、9、14である。

イ) 鎌身凹部

刃部端に屈曲点(アクセント)があるものを鎌身部A、屈曲点がなく丸くカーブしているものを鎌身部Bとする。

鎌身部Aの鉄鎌は1、3、6、(7、)8、9、11、12、14、鎌身部Bの鉄鎌は2、5、不明な鉄鎌は4、10、13である。

ウ) 刃部屈曲点

鎌身部Aの鉄鎌のなかで、鋒から刃部端にかけての部分で屈曲点があるものを鎌身部a、屈曲点がなく丸くカーブしているものを鎌身部bとする。

鎌身部aの鉄鎌は1、3、6、(7、9、)11、14、鎌身部bの鉄鎌は8、不明な鉄鎌は12である。

エ) 刃部側面

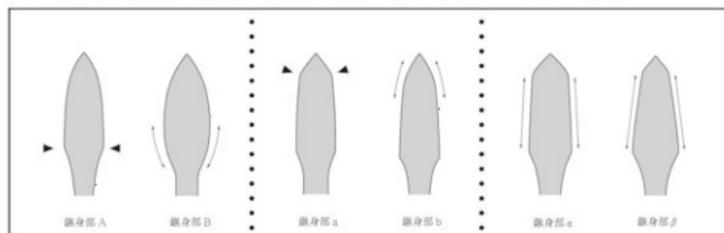
鎌身部Aの鉄鎌のなかで、刃部尚側面が平行なものを鎌身部 α 、鋒に向けて先細りするものを鎌身部 β とする。

鎌身部 α の鉄鎌は、(3、)6、8、11、鎌身部 β の鉄鎌は1、9、14、不明は7、12である。

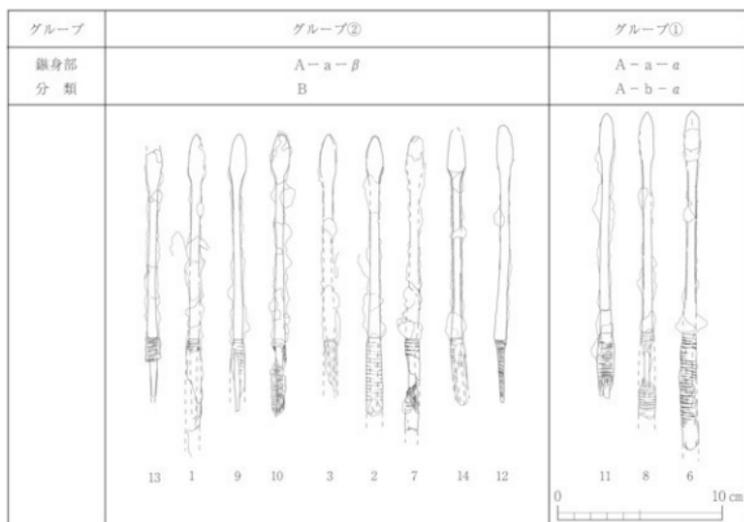
○鎌身部、頸部の長さとし刃部幅

鎌身部と頸部の境界が不明瞭な鉄鎌があるため、鎌身部から頸部にかけての長さとし刃部の幅を分類の基準とした。長さが、13.5cm以上で、刃部の幅が0.9cm以下の鉄鎌(グループ①)と、長さが13.0cm以下で、刃部幅が1.0cm以上の鉄鎌(グループ②)にグループ分けできる。(鉄鎌13は不明)グループ①は6、8、11、グループ②は1、2、(3、)4、5、7、9、10、12、14である。

以上で分類した鎌身部の特徴及び鎌身部と頸部の長さは、表8のとおりである。



第28図 鉄鎌鎌身部模式図



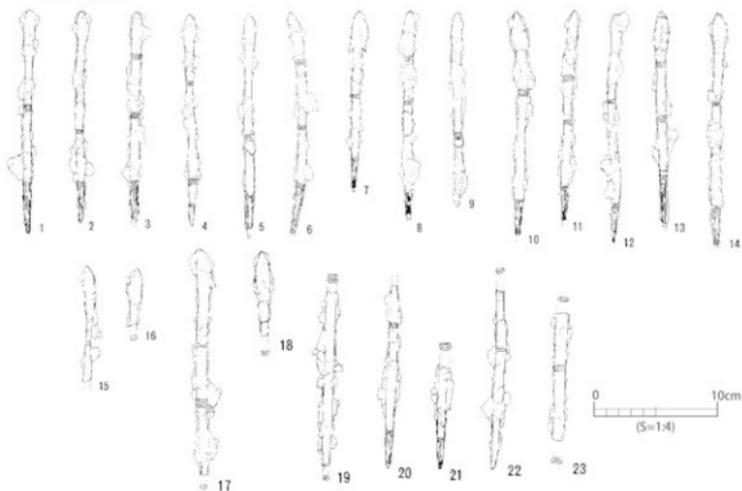
第 29 図 一の谷古墳出土鉄鏃一覽図

挿図番号	鐵身部				鐵身部+ 頸部)の 長さ (cm)	刃幅 (cm)	頸部	矢柄			
	柄(片鉄)	頸部	頸部アサセ メント	側面				頸部周部	漆	有機材	木質
22-1	○	A	a	β	12.6	1.0	無用	○	○	○	-
22-2	-	B	b	-	12.3	1.0	無用	○	○	○	-
22-3	○	A	a	(a)	12.7	1.2	無用	○	○	○	○
22-4	-	-	b	-	11.5	1.1	無用	○	○	○	-
22-5	-	B	b	-	(12.5)	1.1	-	○	○	○	○
22-6	-	A	a	a	13.6	0.9	無用	○	○	○	○
22-7	-	(A)	(a)	-	12.4	1.0	無用	○	○	○	○
22-8	-	A	b	a	13.5	0.9	無用	○	○	○	○
22-9	○	A	(a)	β	12.5	1.1	無用	○	○	-	-
22-10	-	-	-	-	12.8	1.05	無用	○	○	○	○
23-11	-	A	a	a	13.5	0.85	-	○	○	○	-
23-12	-	A	-	-	13.0	1.0	無用	-	-	-	○
23-13	-	-	-	-	-	0.9	-	-	-	○	○
23-14	○	A	a	β	12.8	1.0	肉同もしくは は無用	○	○	○	-

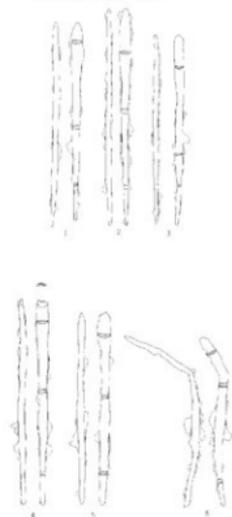
「-」は形状もしくは数値の同説が不明なもの
括弧表示は推測される形状もしくは数値

表 8 一の谷古墳出土鉄器分類表

二名留 3号墳 (21)



増福寺 3号墳 (12)



増福寺 4号墳 (18)



第30図 一の谷古墳出土鉄鍔に類似する鉄鍔 (S=1/4)

種別番号	全長 (cm)	鎌身長 (cm)	刀幅 (cm)	頭部 (cm)	刀部厚 (cm)	頭厚 (cm)	鎌身部・頭部 (cm)	備考
12 - 1	16.3	4.2	0.9	0.6	0.3	0.4	(12.1)	新谷遺跡出土
12 - 2	17.7	5.5	0.9	0.6	0.3	0.4	-	新谷遺跡出土
12 - 3	15.5	4.7	0.75	0.7	0.2	0.2	(11.4)	新谷遺跡出土
12 - 4	15.4	3.7	0.9	0.65	0.25	0.4	-	新谷遺跡出土
12 - 5	14.2	2.9	0.95	0.55	0.3	0.3	-	新谷遺跡出土
12 - 6	-	-	0.8	0.65	0.25	0.3	-	新谷遺跡出土
18 - 1	18.0	-	0.85	0.9	0.5	0.50	-	新谷遺跡出土
18 - 2	14.9	-	0.9	0.85	0.6	0.50	-	新谷遺跡出土
18 - 6	19.5	5.6	0.9	0.9	0.4	0.5	-	新谷遺跡出土
18 - 8	16.75	3.35	0.9	0.8	0.2	0.45	-	新谷遺跡出土
18 - 11	17.8	2.4	0.9	0.7	0.2	0.45	(14.5)	新谷遺跡出土

表9 増福寺3号墳・4号墳出土鉄鎌

種別番号	全長 (cm)	鎌身長 (cm)	刀幅 (cm)	頭部 (cm)	刀部厚 (cm)	頭厚 (cm)	鎌身部・頭部 (cm)	備考
21 - 1	18.2	-	0.9	0.6	-	0.5	(14.5)	新谷遺跡出土
21 - 2	17.2	2.6	0.9	0.6	-	0.3	(13.8)	新谷遺跡出土
21 - 3	17.0	2.9	0.9	0.6	-	0.4	(13.7)	新谷遺跡出土
21 - 4	17.2	3.0	1.0	0.6	-	0.4	(13.4)	新谷遺跡出土
21 - 5	18.3	-	0.9	0.8	-	0.5	-	新谷遺跡出土
21 - 6	17.9	-	0.9	0.7	-	0.4	-	新谷遺跡出土
21 - 7	14.6	3.0	1.5	0.6	-	0.4	-	新谷遺跡出土
21 - 8	16.9	3.7	1.0	0.6	-	0.3	(13.7)	新谷遺跡出土
21 - 9	15.8	-	-	0.7	-	0.3	(13.4)	新谷遺跡出土
21 - 10	18.2	3.2	1.2	0.8	-	0.5	(15.2)	新谷遺跡出土
21 - 11	17.2	-	-	0.8	-	0.5	-	新谷遺跡出土
21 - 12	18.6	-	-	0.6	-	0.3	-	新谷遺跡出土
21 - 13	17.4	3.5	1.0	0.8	-	0.5	12.8	新谷遺跡出土
21 - 14	18.8	3.0	1.2	0.7	-	0.4	-	新谷遺跡出土

表10 二名留3号墳出土鉄鎌

グループ①の鉄鎌は鎌身部 A・a - a もしくは A・b - a であり、確実に鎌身部 a といえる鉄鎌はすべてグループ①に分類される。(鉄鎌 6、8、11) よってグループ①の鉄鎌は、一つの規格性のもと製作されたと推測される。またグループ②の鉄鎌には様々な鎌身形態が存在し、鎌身部 A と鎌身部 B の鉄鎌で細分できるかもしれないが、それぞれの鉄鎌の個体差ということも考えられる。

一の谷古墳出土鉄鎌は、杉山秀宏氏の分類によると、長頭鎌群 B 形式 - 第 2 形式と考えられ、重さはほぼ 10 ~ 20 g におさまる第 2 形式であり、時期は陶器古窯群編年で表すと TK 216 ~ TK 47 形式と考えられる。一の谷古墳出土の長頭鎌の特徴は、鎌身部がナデ間である点、鎌身部に片筋状を呈する資料を含む点から長頭鎌の初期の要素を持ち合わせている可能性が考えられる。

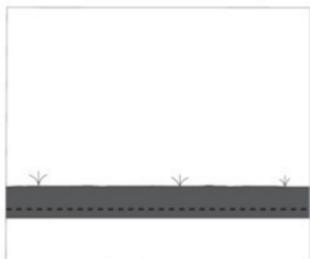
奥小山 8 号墳第 3 主体部 (鳥取県倉吉市上余戸) では、一の谷古墳出土長頭鎌に類似する長頭鎌が出土しており、主体部の時期は出土した土師器から TK 208 形式に併行する時期と考えられている。また近隣の古墳では、増福寺 4 号墳 (松江市八雲町) 出土鉄鎌 (第 30 図 18 - 13)、二名留 3 号墳 (松江市乃木福富町) 出土鉄鎌 (同図 21 - 2) などが一の谷古墳出土長頭鎌と類似していると考えられる。

2. その他の遺物

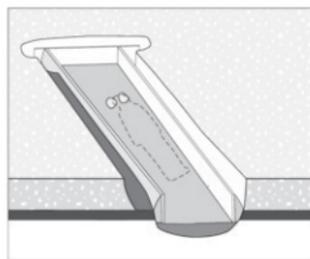
一の谷古墳の西側斜面 (C7) の表土層からは、5 世紀中葉頃 (TK 208 型式以前の時期) の須恵器の甕が出土しているが、本来古墳に伴う遺物であった可能性が考えられる。

3. 墳丘及び主体部の特徴について

墳丘及び主体部の構築方法について検討を加えてみたい。まず、谷に面した丘陵端部を選地し、丘陵頂部の高い部分を掘削して平坦面を成形する。(ただし墳頂部は、もともと平坦に近い状況だっ



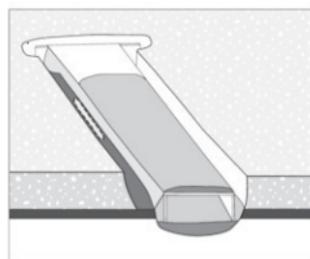
①墳丘頂部を掘削して、平坦面を成形する。
(破線は掘削前)



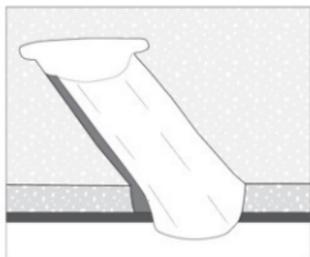
④墓壇底部に粘土を貼る。その上に側板、小口板を
設置し、木棺を固定する。



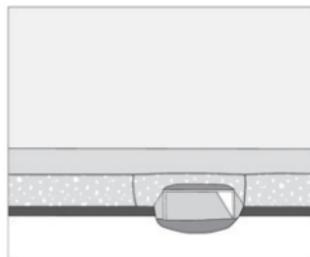
②墳頂平坦面に盛土を施す。



⑤亡骸を木棺に埋葬し、蓋板を載せ粘土を貼る。
木棺横に矢(鉄線)を副葬する。



③盛土正面から断面がU字状になるように墓壇を掘削する。



⑥墓壇を埋めて、墳頂部に盛土を施す。

第31図 一の谷古墳主体部構築模式図

	古墳名	立地	墳形	墳丘規模 (m)	外表面施設	埋葬施設	埋葬施設 規模 (m)	出土遺物 (主体部)	出土遺物 (主体部以外)	枕石	時期	備考
1	一の谷古墳	谷手見下八 千石原遺跡	円形	19 × 16.5 高さ 1.5	-	組合式木棺 (粘土)	3.34 × 0.6	鉄製鋼片 1本	-	石2	朝靨古墳群 朝靨TK20-1, G 谷古墳群	-
2	土田古墳群 1号墳	谷手見下八 千石原遺跡	方墳	16 × 19	(墳丘内に平石面)	木棺直葬	2.35 × 0.4	赤刀、鉄削、 土師器高杯 (主体部上)	-	-	古墳時代中期	出土土師器の 粘土質土
3	熊曾古墳群 1号墳	丘陵上	方墳	17 × 15 高さ 1.6	-	組合式木棺 (粘土) (墳丘内に 可動性あり)	3.0 × 0.6	刀子、赤銅製短刀、緑色陶器 製短刀、土師器高杯 (主体部) 等 土師器類が多数	-	-	古墳時代中期	出土土師器の 粘土質土
4	菊古墳群 1号墳	丘陵上	円墳	直径 7	-	-	-	-	-	-	古墳時代中期	出土土師器の 粘土質土
5	菊古墳群 2号墳	丘陵上	円墳	直径 10	(墳丘内に平石面)	木棺直葬	2.3 × 0.5	-	-	-	古墳時代中期	-
6	菊古墳群 3号墳	丘陵上	方墳	11.5 × 10	(墳丘内に溝と平石面)	木棺 (横形) (横形)	3.0 × 1.5	-	-	石1 (M.C.R.)	古墳時代中期	出土土師器の 粘土質土
7	山崎古墳	丘陵上 (最高所)	方墳	19 × 19 高さ 2.0	(墳丘内に平石面)	横形木棺	2.4 × 0.6	鉄削 4丁、鉄刀 1丁、 鋼1、 鉄削 4丁以上	-	-	古墳時代中期 後半より後葉後半	土師器 類が多数
8	八色谷古墳 1号墳	谷手見下八 千石原遺跡	方墳	約 10 × 11	-	木棺直葬	2.7 × 1.08	石製小玉、 須石部・雲 (木棺上)	-	-	大谷編年 表第 2 期	-
9	八色谷古墳群 2号墳	丘陵上	方墳	約 7 × 6	-	-	-	-	-	-	-	-
10	八色谷古墳群 3号墳	丘陵上	方墳	約 4 × 4	-	-	-	-	-	-	-	-
11	八色谷古墳群 4号墳	丘陵斜面	方墳	9 × 9 高さ 2.0	周溝、雲石	木棺直葬	3.25 × 2.2	-	須石部 (平石、横 溝) 須石部 (平石、 平石) 須石部 (平石、 平石)	-	大谷編年 表第 2 期	-
12	長崎古墳群 1号墳	丘陵上	前方 後方墳	32	石列、雲石、人物彫刻 家形塚、円筒形埴輪	型代式石室	3.8 × 1.3 高さ 1.0	鋼、玉削、鉄製品、石製製品、 須石部	-	-	古墳時代中期 (大谷編年 1 期)	-

表 11 朝靨川流域の中期古墳比較表

たと考えられる。)①墳丘斜面を掘削するとともに、墳頂部に盛土を施して墳頂部を成形する。②墳頂部に断面U字型の墓壇を掘削する。③墓壇の底に棺床粘土を貼り、その上に枕石を設置し、さらに銅板及び小口板をたて、裏込め土で木棺を固定する。④亡骸を納棺して、蓋板をのせて、その上に被覆粘土を貼る。木棺の横に矢(鉄鏃)を副葬する。⑤墓壇を埋め墳頂部に盛土を施す。⑥最終的に墳丘を成形して、墳丘を完成させる。⑦

松江市東津田町南外 2号墳の報告書で川原和人氏がまとめている墳丘築造一覽表に一の谷古墳をあてはめると、墳丘規模は小規模 (20 m 以下)、盛土方法は II (主体部が盛土から掘り込まれ、地山に達しているもの) であり、盛土方法は A (普通の盛土)、盛土率は e (33% 以下) に相当する。また主体部は木棺直葬に近いが、墓壇断面が U 字型であり、棺床粘土とわずかではあるが被覆粘土が検出されていることから粘土部に分類したい。川原氏によれば中期古墳の中には、谷部分を厚く盛る方法 (B) や土堤状盛土が見られる盛土法 (D) が多く見られ、盛土率も 33% 以上のもの (b) や 50% 以上のもの (a) が多く確認されている。しかし一の谷古墳はこの地方の一般的な中期古墳の在り方とは意匠が異なる。一の谷古墳を造墓する際の選地にあたって、目標とする墳丘に近い場所が選ばれ、盛土によって墳丘を大幅に成形する必要はなかったことによると考えられる。

主体部は墳頂平坦面のやや東より部分に位置し、N - 25° - E に掘られており墳丘に対してやや斜行している。また主体部は、組合式木棺の上下を粘土で覆う粘土部に指向する形態をとる。一の谷古墳と同じ丘陵上には菊捨古墳が位置しており、中心主体は、粘土部を伴う長さ 3.5 m、幅 0.5

mの船底型木棺のである。出土遺物から4世紀末頃の古墳と考えられている。5世紀中葉の一の谷古墳とは時期的に半世紀ほどのひらきがあるが、主体部の築造方法に共通点が見られることから一の谷古墳は珂捨古墳と同一系譜の古墳であると推測される。

4. 一の谷古墳の時期と性格

一の谷古墳では、主体部から鉄鏝が出土しており、時期は前述したとおり、陶器古窯群の編年におけるTK 216型式からTK 47型式に併行する時期と考えられる。ただし古墳西斜面から出土している須恵器・甕が古墳に伴っていたと考えた場合TK 216型式からTK 208型式の時期にしばることができる。

朝酌川流域の発掘調査された中期古墳は、表11のとおりである。一の谷古墳と同様の墳丘規模10～20mの古墳が多く確認されているが、金崎1号墳は全長32mの前方後方墳である。埋葬施設は竪穴式石室であり、多くの副葬品が出土し、形象埴輪、円筒埴輪、墓石など外表施設も確認されている。時期は出土している須恵器からTK 47型式に併用する時期である。

古墳の様相から古墳時代中期後半の朝酌川流域の状況を考察した場合は以下のとおりである。一の谷古墳を始めとする小規模古墳は朝酌川流域内の小地域ごとの古墳と考えられる。朝酌川流域全体の首長墓たる金崎1号墳が築造されるのはTK 47型式併行期であるが、一の谷古墳はそれ以前に築造されていた可能性が高く、小規模古墳（もしくは小規模古墳群）は金崎1号墳築造以前から展開していたと推測される。またさらに言及すれば、この時期、朝酌川流域内各所に小規模古墳が築造される状況がまず展開しだし、その後朝酌川流域全体を束ねる首長を輩出する社会情勢に進展もしくは変化したことが想像される。

【参考文献】

- 有限会社平凡社地方資料センター 1995『日本歴史地名体系第三三巻 鳥根県の地名』株式会社 平凡社
加藤義成 1997『修訂出雲の国風土記参究』今井書店
伊藤雅文「初期群集墳再考」1988『橿原考古学研究所論集 第八』橿原考古学研究所編
杉山秀宏「古墳時代の鉄鏝について」1988『橿原考古学研究所論集 第八』橿原考古学研究所編
鈴木一有「中期古墳における副葬品の特徴」2003『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告 第11集』
田辺昭三 1981『須恵器大成』凸版印刷株式会社
正岡睦夫・松本岩雄 1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
水野敏典「古墳時代中期における鉄鏝の分類と編年」2003『橿原考古学研究所論集 第十四』橿原考古学研究所編
月の輪古墳刊行会 1960『月の輪古墳』
山陰考古学研究会 2002『山陰の前期古墳』
花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究」鳥根考古学会 1987『鳥根考古学会誌 第4集』
松山智弘「山陰における古墳時代前半期の土器の様相」鳥根考古学会 1991『鳥根考古学会誌 第8集』
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」鳥根考古学会 1994『鳥根考古学会誌 第11集』
中川 寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域関係」鳥根考古学会 1996『鳥根考古学会誌 第13集』
市原市教育委員会 1980『上総 山王山古墳発掘調査報告書』
大阪府教育委員会 1967『弁天山古墳群の調査』

- 静岡県磐田郡豊岡村教育委員会 2000 『大手内古墳群』
- 奈良県教育委員会 1981 『新沢千塚古墳』
- 広島県立歴史民俗資料館 2002 『三千余基の古墳を残した 霧の子孫たち - 三次盆地と中国山地の古墳文化 -』
- 福岡県甘木市教育委員会 1979 『池の上墳墓群 甘木市文化財調査報告 第5集』
- 福岡県糟屋郡志免町教育委員会 1984 『壹葉古墳群 志免町文化財調査報告 第2集』
- 倉吉市教育委員会 1998 『奥小山8号墳発掘調査報告書』
- 西伯町教育委員会 1992 『清水谷遺跡』
- (財)鳥取県教育文化財団 1981 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- (財)鳥取県教育文化財団 1981 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- (財)鳥取県教育文化財団 1981 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
- 鹿島町教育委員会 2002 『奥才古墳群第8支群』
- 東出雲町教育委員会 1983 『寺床遺跡調査概報』
- 八雲村教育委員会 1981 『増福寺古墳群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 1983 『松江園都市計画事業乃木地区区画整備事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 1984 『山崎古墳』
- 松江市土地開発公社・松江市教育委員会 1986 『堤廻遺跡』
- 松江市教育委員会 1985 『柴古墳群』
- 松江市教育委員会 1986 『小丸山古墳群』
- 松江市教育委員会 1987 『細曾1号墳』
- 松江市教育委員会 1989 『芝原遺跡』
- 松江市教育委員会 1992 『二名留古墳群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 1993 『伝宇牟加比売命御陵古墳』
- 松江市教育委員会 1993 『上浜弓1号墳他発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1994 『柴尾遺跡発掘調査報告書(Ⅰ)』
- 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1995 『柴尾遺跡他発掘調査報告書(Ⅱ)』
- 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1998 『川原後谷横穴群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1999 『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替能動整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1999 『松江市文化財調査報告書 第79集 ソフトビ
ジネスパーク建設に伴う大佐遺跡群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 2001 『奥山古墳群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 2006 『大井窟跡群 山津窟跡・山津遺跡発掘調査報告書』
- 鳥根県教育委員会 1962 『薄井原古墳調査報告』
- 鳥根県教育委員会 1971 『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集
- 鳥根県教育委員会 1972 『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集
- 鳥根県教育委員会 1979～1992 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳ
- 鳥根県教育委員会 1980～2003 『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅹ

- 鳥根県教育委員会 1983 『鳥根県埋蔵文化財調査報告書 第X集』
- 鳥根県教育委員会 1984 『高広遺跡発掘調査報告書』
- 鳥根県教育委員会 1988 『祖子分長池古墳』
- 鳥根県教育委員会 1992 『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 重富遺跡・やつおもて古墳群・柳ヶ谷遺跡』
- 鳥根県教育委員会 1993 『八色谷古墳群』
- 鳥根県教育委員会 1997 『本庄川流域条里遺跡』
- 鳥根県教育委員会 1998 『荒船古墳群・荒船遺跡・本庄川流域条里遺跡（2）』
- 鳥根県教育委員会 2001 『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2002 『馬場遺跡・杉ヶ挽遺跡・客山墳墓群・連行遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2002 『田中遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・角谷遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2003 - 『埋蔵文化財調査7ヶ年報』11 -
- 鳥根県教育委員会 2007 『南外2号墳・勝負遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2007 『東前田遺跡・中嶺遺跡・大谷口遺跡・金クソ谷遺跡1区・2区・3区』
- 鳥根県教育委員会 2008 『原田遺跡（4）』
- 鳥根県教育委員会 2008 『九景川遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2009 『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳群・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群』
- 鳥根県教育委員会 2009 『山持遺跡 vol.5（6区）』
- 鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター 2003 『宮山古墳群の研究』
- 鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター 2004 『松江市東部における古墳の調査』
- 鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター 2007 『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』

写真図版



1. 金クソ谷遺跡4区調査前風景（北から）



2. 金クソ谷遺跡4区ピット検出状況（北西から）



1. 金クソ谷遺跡4区ベルトA土層断面（1）（南東から）



2. 金クソ谷遺跡4区ベルトA土層断面（2）（東から）



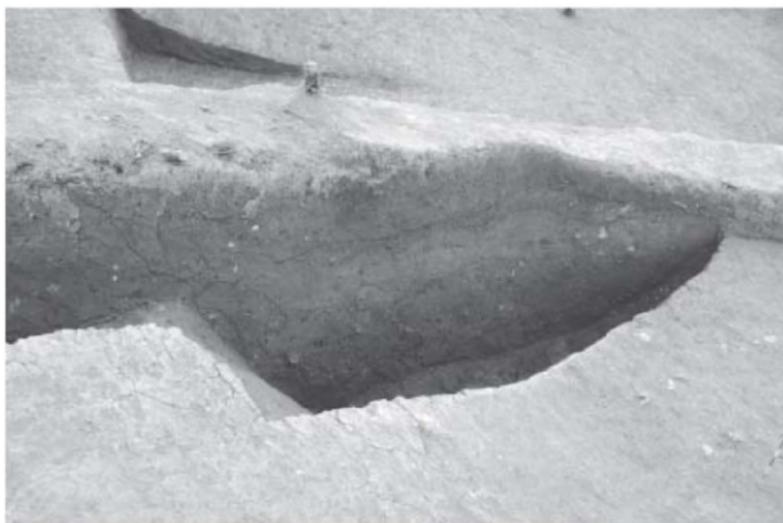
1. 金クソ谷遺跡4区ベルトA土層断面(3)(東から)



2. 金クソ谷遺跡4区ベルトB土層断面(1)(北東から)



1. 金クソ谷遺跡 4区ベルトB土層断面（2）（北東から）



2. 金クソ谷遺跡 4区ベルトB土層断面（3）（北から）



1. 金クソ谷遺跡4区ベルトC土層断面（1）（北から）



2. 金クソ谷遺跡4区ベルトC土層断面（2）（北東から）



1. 金クソ谷遺跡4区完掘状況（西から）



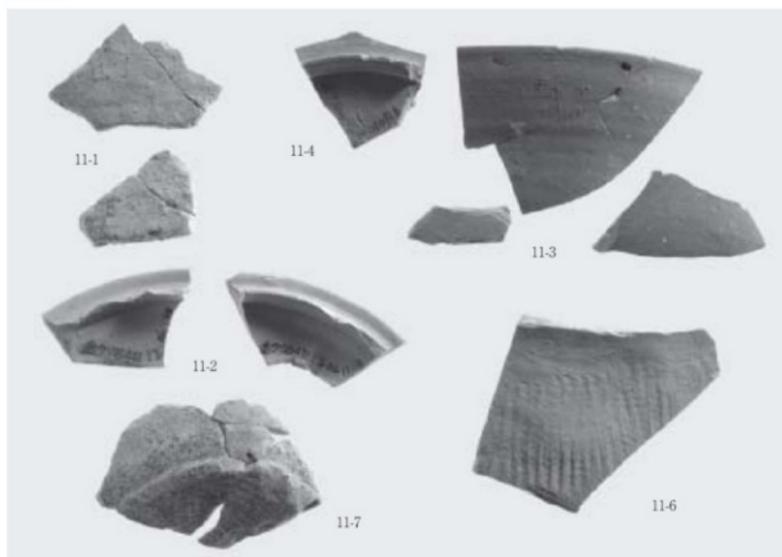
2. 金クソ谷遺跡4区完掘状況（北から）



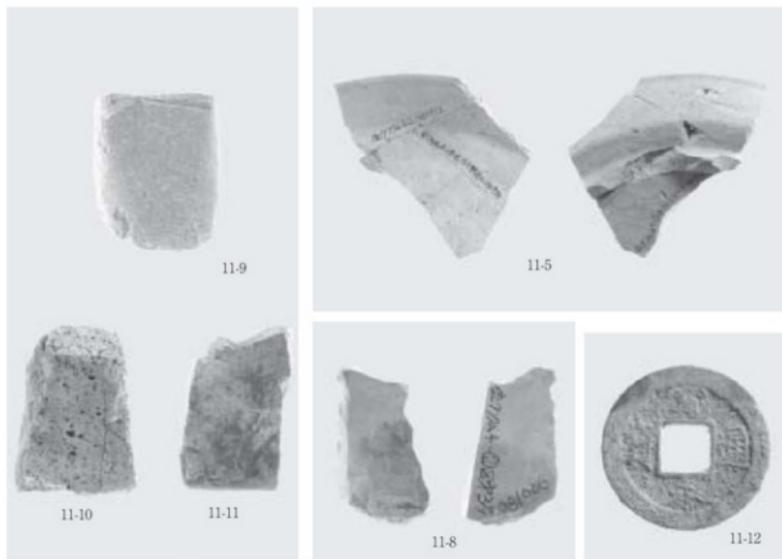
1. 金クソ谷遺跡4区（上空から）



2. 金クソ谷遺跡4区（南東上空から）



1. 金クソ谷遺跡 4区出土遺物 (1)



2. 金クソ谷遺跡 4区出土遺物 (2)



1. 一の谷古墳調査前風景（1）（南西から）



2. 一の谷古墳調査前風景（2）（南西から）



1. 一の谷古墳調査前風景（3）（北西から）



2. 一の谷古墳南西側調査前風景（1）（北東から）



1. 一の谷墳調査区中央部調査前風景（2）（北東から）



2. 一の谷墳調査区中央部壁面土層断面（南から）



1. 一の谷古墳E6-E7ライン土層断面（南から）



2. 一の谷古墳C5-D5ライン土層断面（西から）



1. 一の谷古墳D5-E5ライン土層断面（西から）



2. 一の谷古墳E5-F5ライン土層断面（南西から）



1. 一の谷古墳F5-G5ライン土層断面（南西から）



2. 一の谷古墳G5-H5ライン土層断面（南西から）



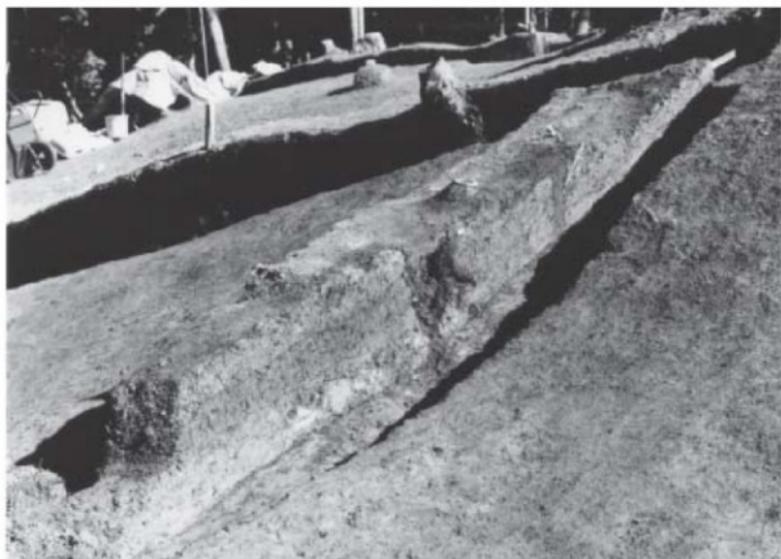
1. 一の谷古墳E4-E5ライン土層断面（西から）



2. 一の谷古墳D5-E5ライン土層断面（南西から）



1. 一の谷古墳E5-E6ライン土層断面（南から）



2. 一の谷古墳D6-D7ライン土層断面（南から）



1. 一の谷古墳E3-E4ライン土層断面（東から）



2. 一の谷古墳主体部E7-Eライン土層断面（南から）



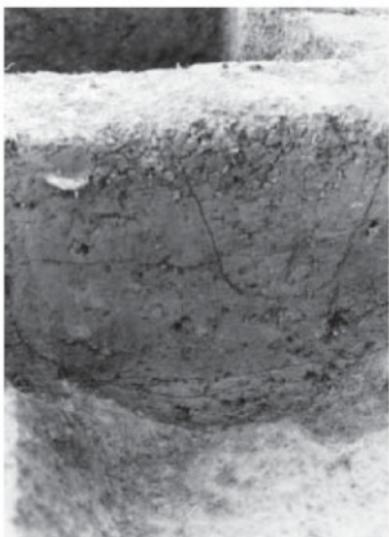
1. 一の谷古墳主体部C-C'ライン土層断面（南から）



2. 一の谷古墳主体部C'-Cライン土層断面（南から）



1. 一の谷古墳主体部E-E'ライン土層断面（北東から）



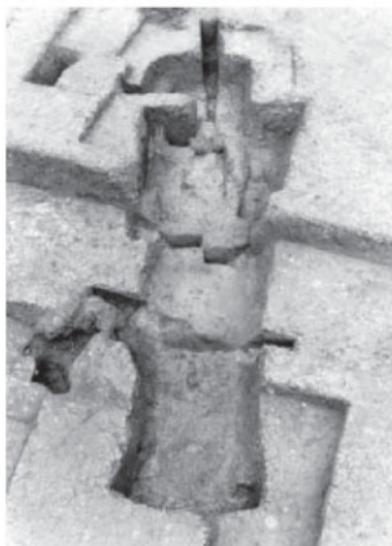
2. 一の谷古墳主体部E-E'ライン土層断面拡大（北東から）



3. 一の谷古墳主体部中央部横断土層断面（南西から）



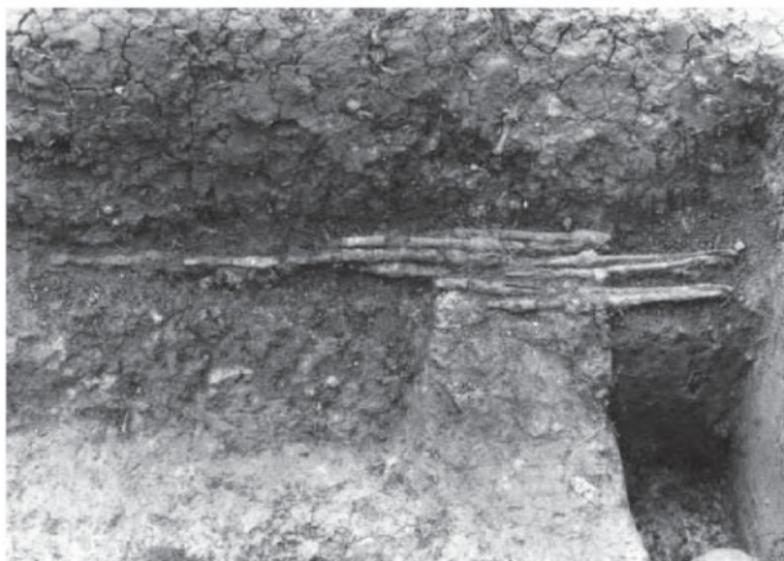
1. 一の谷古墳主体部B-B' ライン土層断面 (北西から)



2. 一の谷古墳主体部鉄鏃出土状況
(1) (南西から)



3. 一の谷古墳主体部鉄鏃出土状況(2)
(南西から)



1. 一の谷古墳鉄鍬出土状況 (1) (南東から)



2. 一の谷古墳鉄鍬出土状況 (2) (南東から)



1. 一の谷古墳主体部粘土床検出状況（南西から）



1. 一の谷古墳主体部枕石及び粘土検出状況 (1) (南西から)



2. 一の谷古墳主体部枕石及び粘土床検出状況 (2) (南西から)



3. 一の谷古墳主体部南端完掘状況 (北東から)



1. 一の谷古墳主体部南端完掘状況（東から）



2. 一の谷古墳主体部南端完掘状況拡大
（北東から）



3. 一の谷古墳主体部完掘状況（北東から）



1. 一の谷古墳E5-F5ライン土層断面（南西から）



2. 一の谷古墳主体部南外土層断面（東から）



1. 一の谷古墳墳丘検出状況（南西から）



2. 一の谷古墳墳頂部検出状況（南西から）



1. 一の谷古墳墳頂部黒色土検出状況（南西から）



2. 一の谷古墳墳頂完掘状況（南西から）



1. 一の谷古墳西斜面須恵
器出土状況（西から）



2. 一の谷古墳S D 02
土層断面（北から）



3. 一の谷古墳S D 01
検出状況（西から）



1. 一の谷古墳 (1) (上空から)



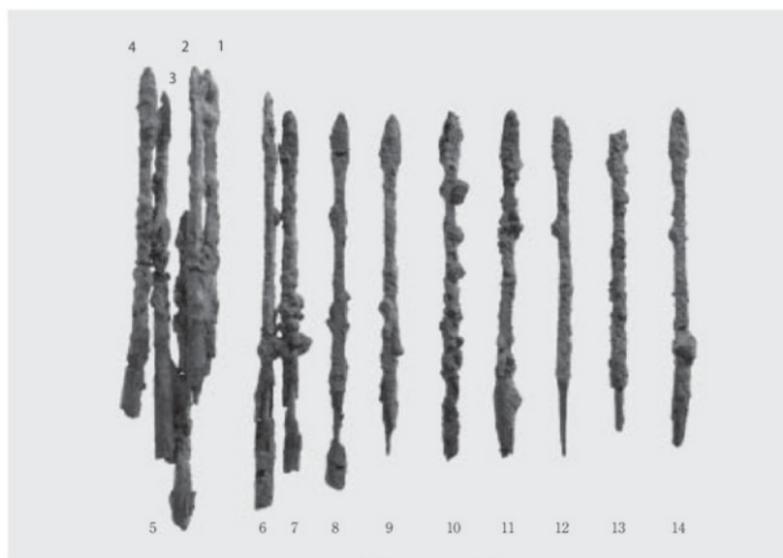
2. 一の谷古墳 (2) (上空東から)



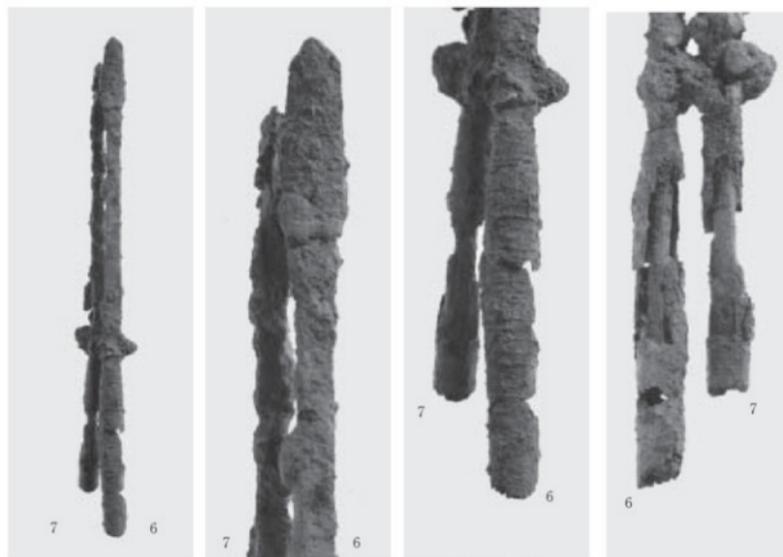
1.一の谷古墳(3)(上空南から)



2.一の谷古墳(4)(上空西から)



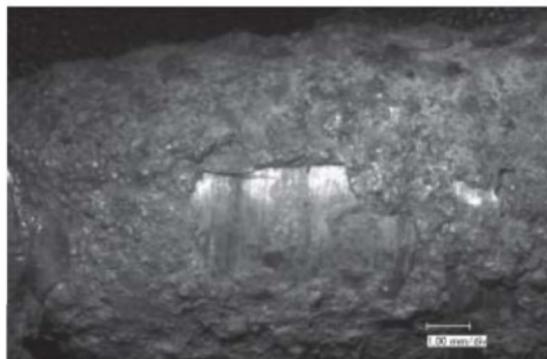
1. 一の谷古墳主体部出土鉄鏃 (1)



1. 一の谷古墳主体部出土鉄鏃 (2)



1. 鉄鏃 3



3. 鉄鏃 3 矢柄部分拡大写真 (A)



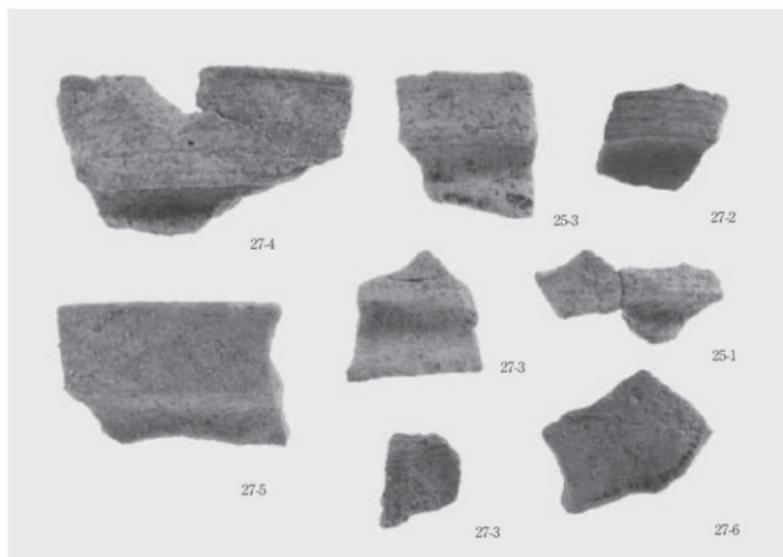
4. 鉄鏃 3 矢柄部分拡大写真 (B)



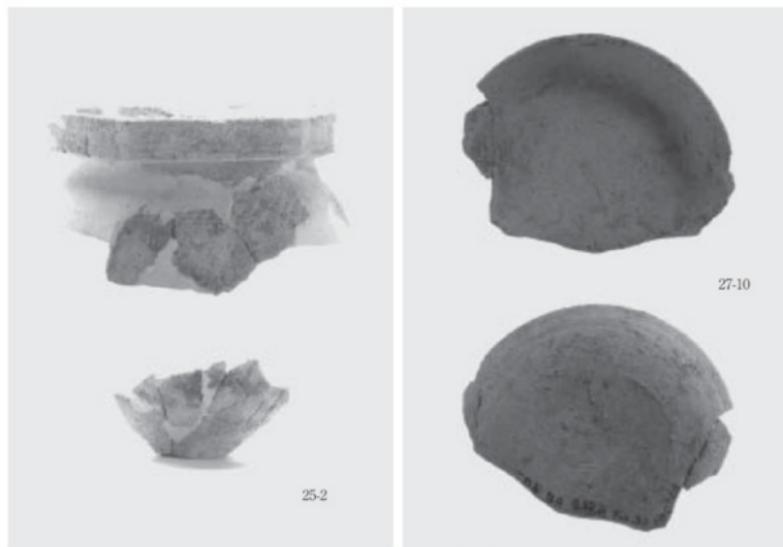
2. 鉄鏃 12



5. 鉄鏃 12 茎部分拡大写真 (C)



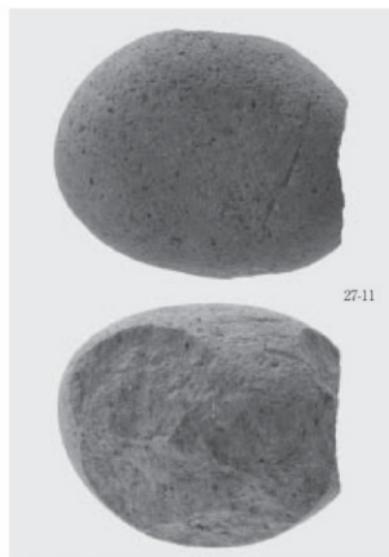
1. 一の谷古墳出土遺物 (1)



2. 一の谷古墳出土遺物 (2)



1.一の谷墳主体部出土遺物（3）



1.一の谷墳主体部出土遺物（4）

報告書抄録

フリガナ	カナタツダニイセキヨシク・イチノタニコワン							
書名	金タツ谷遺跡4区・一の谷古墳							
シリーズ名	国道431号道路改築事業（川津バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ							
シリーズ番号	Ⅹ							
編集者名	伊藤 智・松山智弘・野津研吾							
編集機関	鳥根県教育埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 鳥根県松江市打出町33番地 Tel 0852-36-8608（代） E-mail mibun@prefshimane.lg.jp							
発行年月日	西暦2011年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金タツ谷遺跡4区	鳥根県松江市 福原町底神田949-20	32201	D1020	35°30'16.95"	133°34'18"	2008/28 ～ 2008/120	1,200㎡	道路建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金タツ谷遺跡4区	遺物包含層ほか	弥生時代 ～ 江戸時代	ピット、土坑	土師器 陶磁器 須恵器 石製品 土師瓦土器 古銭				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一の谷古墳	鳥根県松江市 下東川津町1373	32201	D800	35°29'39.90"	133°06'00.69"	2009/030 ～ 2009/106	1,200㎡	道路建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
一の谷古墳	古墳ほか	弥生時代 ～ 江戸時代	粘土層、組合式木棺、溝状遺構、ピット	弥生土器、土師器、須恵器、土師瓦土器、鉄製品、石製品				
要約	<p>本書は平成20年度に実施した松江市金タツ谷遺跡4区及び平成21年度に実施した松江市一の谷古墳の調査成果を収録している。</p> <p>金タツ谷遺跡は、松江市中央部に展開する高山から派生する丘陵上に位置する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。4区の調査では、古代から近世の遺物が出土している。</p> <p>一の谷古墳は共通溝に注ぐ朝船川左岸の丘陵上に位置する古墳時代中期の古墳である。墳形は北西から北東にかけては円形、南東から南西にかけては方形の不整形な形状をとり、規模は北西から南東にかけては19m、北東から南西にかけては16.5mである。墳頂部で簡略化された粘土層、組合式木棺をもつ主体部1基が確認され、棺床部には枕石が設置されていた。椀外には鉄鍬14本が調査されていた。墳丘西側斜面からは、陶器編年TK 208型式以前の甕が出土している。これらの遺物から、古墳の時期は5世紀中葉と考えられる。また古墳以外では、弥生時代後期中葉の溝状遺構が検出され、古墳以前の土地利用が確認された。</p>							

金クソ谷遺跡4区・一の谷古墳

2011年3月 発行

発行 鳥根県教育委員会

編集 鳥根県埋蔵文化財調査センター

〒690 - 0131 鳥根県松江市打出町33

TEL 0852 - 36 - 8608

<http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>

松栄印刷有限公司

